

みんなくりポジトリ

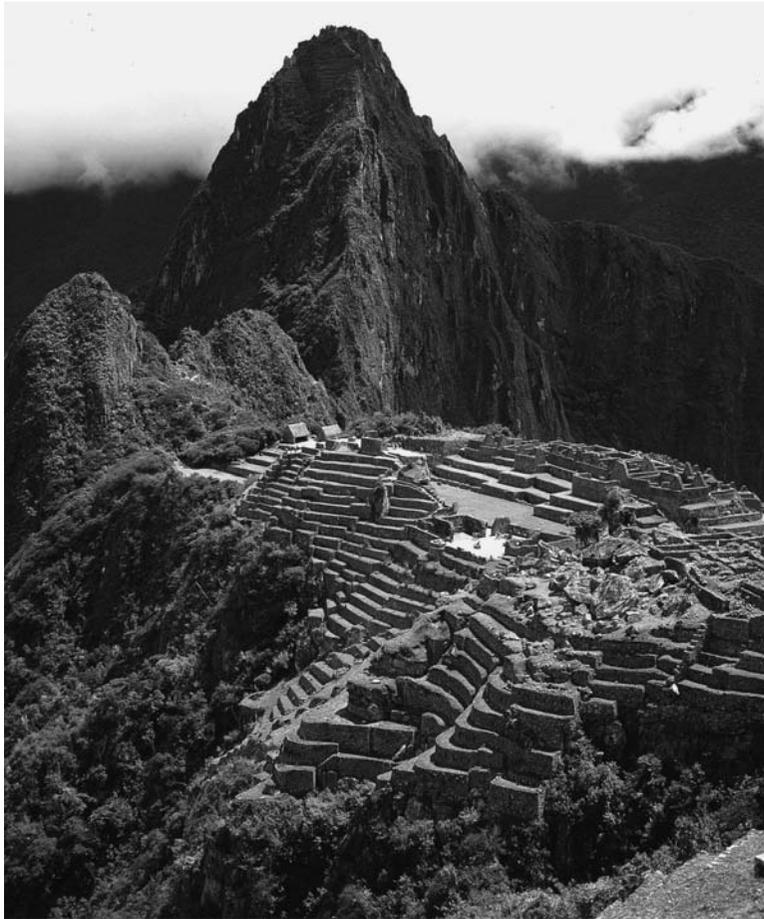
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

第5章 インカ帝国の農耕文化： 主としてクロニカ史料の分析から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008939

第5章 インカ帝国の農耕文化

—主としてクロニカ史料の分析から—



インカ時代の最大の遺跡、マチュピチュ。アンデスの東斜面にある

1 はじめに

インカ帝国の農耕文化については、これまで使えなかった資料が利用できる。それは、インカ帝国征服後、アンデスにやってきたスペイン人たちが書き残した記録（クロニカ）である。彼らのなかにはアンデスの人びとの暮らしを記録した者が少なくなく、そのなかには本書で対象とする農耕文化について報告しているクロニスタ（記録者）もあり、その記録が参考になるのである。

ただし、これらの記録を扱うとき、注意しなければならない点が少なくとも2つある。そのひとつは、これらの記録はあくまでスペイン人の価値観をとおして見たものである、という点である。その端的な例がアンデスの土着宗教に関するもので、スペイン人たちはキリスト教徒の立場から、そのすべてを邪教として切り捨てている。もうひとつは、彼らの記録には大きな偏りがある点だ。スペイン人たちはインカ帝国に大きな関心をもっていたので、彼らの記録はインカ王やその親族に集中しており、一般民衆についての記録が少ないことである。このような点に注意しながら、以下ではクロニカの記録を中心としてインカ帝国の農耕文化の特色を明らかにしよう。

2 ティワナク由来の農耕？

15世紀頃、中央アンデスには各地に王国があった。海岸地帯では、北海岸にチムー王国、南海岸にはチンチャの王国があった。また、山岳地帯ではペルー南部高地にのちにインカ帝国へと発展するクスコ王国、ティティカカ湖畔ではルバカやコヤなどの諸王国があった。一方、北部高地のように都市国家が成立しないで部族レベルにとどまる多くの民族集団が住んでいるところもあった。

これらの地方国家を統一したのが、ほかならぬインカ帝国であった。15世紀のはじめ頃、クスコ盆地だけを支配していたインカ族が急速に勢力を広げ、わずか100年ほどのあいだに中央アンデス全域を支配下におき、さらに隣接する地域をも征服した。その最盛期には北は現コロンビア南部からエクアドル、ペルー、ボリビアを経てチリ中部に至るまでのアンデスの大半の地域を領土としたのである。

さて、それではインカ族とは何者なのか。彼らはどこから、どのようにしてクスコにやってきたのだろうか。これらについてはよくわかっていないが、インカ族の起源に関してはいろいろな伝説が伝えられ、その伝説からはインカ帝国の初期の農耕文化についてもヒントが得られる。

たとえばシエサ・デ・レオンはインカの起源神話について次のように述べている。

「……長いあいだ太陽がなく、そのため大へんな難儀をこうむっていたため、人々は彼ら

が神と考えるものに祈りを捧げ、光をお与え下さいと願った。このような状態が続いてのち、コリャオの大きな湖の中に浮かぶティティカカ島から、輝かしさにあふれた太陽が昇ったので、みなよろこんだ。そして、このことが起こってのち、南の地方から、背の高い白い人が突然やって来てすがたを現したが、その風采・外貌にひじょうに威厳があり尊敬を勝ち得たという。そしてこのようにしてやって来たその人物は、ひじょうにすばらしい能力を持ち、山を平地にしたり、平地から大きな山を作ったり、また地に根を下ろした岩に泉を湧き出させたりした。人々は、そのような力を知って、彼を、すべての作られしものの創造者、ものごとの創始者、太陽の父と呼んだ。〔シエサ 1979 (1553): 25-26〕

同じような起源神話は、インカ・ガルシラーソも採録している。そして、その神話のなかで創造神であるウイラコチャはティティカカ湖からあらわれたと記録している。さらに、インカ・ガルシラーソ [1985 (1609): 59-61] は、太陽のつかわした2人の人間がティティカカ湖を発ち、クスコに旅立ってインカ帝国の礎を築いたという以下のような伝説を記録している。

……太陽が未開の状態にある人間をあわれんで、自分の息子と娘を天から地上に送った。野蛮な人間を町に住ませ、土地を耕して作物を栽培したり、家畜を飼って生活を豊かにする方法を教えるためである。ティティカカ湖に降り立った2人は北にむかって旅だった。そして、太陽の命により金の棒を地に打ち込み、それが地中深くに突き刺さる場所を探して歩いた。しかし、金の棒が突き刺さる場所はなく、ついに2人はクスコ盆地のワナカウリの丘に到着した。そこで金の棒を打ちつけて見ると、それは地中深く沈み、たちまち見えなくなってしまった。当時、クスコは一面荒涼たる山地だったが、そこに2人の兄妹は都を築き、周囲の未開な人びとを集めて人間らしい生き方を教え、インカ帝国の礎を築いた。この兄こそ初代のインカ王、マンコ・カパックであり、妹はママ・オクリョ・ワコという……。

これらは伝説であるが、歴史的な事実と照らし合わせて見ると興味深いことがいくつもある。まずインカ帝国を築いたインカ族は、これらの伝説によればティティカカ湖地方からやってきたのではないかと考えられることである。このティティカカ湖畔は1000年近くにわたりティワナク文化が栄えていたところであり、そこではインカの成立前もいくつもの王国が生まれていた。したがって、ティティカカ湖畔はアンデスのなかでも文化の程度が高く、それをささえていた農耕もかなりの程度に発達していた可能性がある。

一方、クスコ地方は農耕が十分に発達しておらず、人びとの文化の程度も低かったのではないか。そのことを上記の伝説が物語っている。当時、「クスコが荒涼たる山地だった」ということや「クスコの住人を未開人」と表現していることなどである。そのせいか、伝説ではインカが新しい文化を導入した教化者としての役割がしばしば強調されている。

この点で興味深いことがある。マンコ・カパックがクスコに来てはじめてトウモロコ

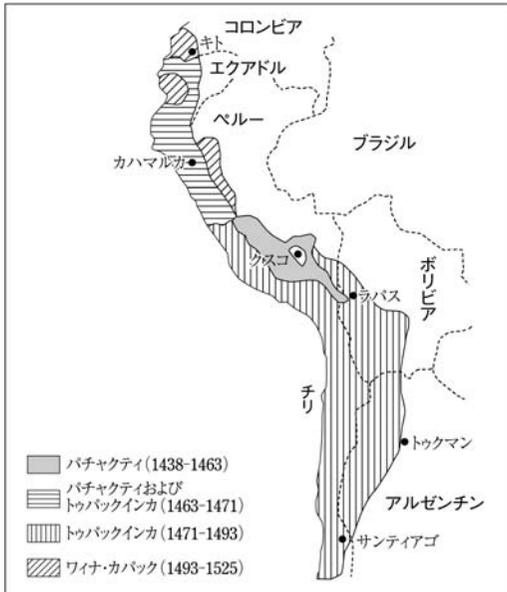


図5-1 インカ帝国の拡大。インカ帝国はパチャクティ王時代から拡大を開始した

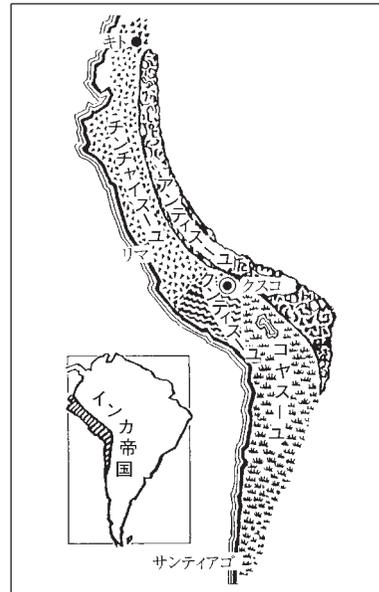


図5-2 インカ帝国の4つの地方(スーユ) [Soriano 1995] より

シの種を播いたという伝説のあることだ。これもインカの新しい文化の教化者としての役割を強調するものであろう。同時に、もうひとつの可能性も示唆する。それは、インカ帝国の成立とともに、アンデスの山岳地域ではじめて本格的なトウモロコシ栽培が始まった可能性である。じつは、これは可能性にとどまらず、考古学的な調査から明らかになってくる。この点については後述することにしよう。

さて、クスコに都をさだめたマンコ・カパックたちであったが、その始まりはマンコ・カパックがその妻とともに造った「藁ぶきの小さな石小屋」にすぎなかった。この小屋こそは、のちにインカ帝国の中核の宗教施設であり、「太陽の神殿」で知られるようになるものである。この「太陽の神殿」は礎石が残されており、それをクスコで現在も見ることができる。このマンコ・カパックを初代のインカ王として、インカ帝国は拡大を開始する。

ただし、マンコ・カパックから第8代のインカ王のウイラコチャまでは伝説の時代であり、歴史的にインカ王の存在が明らかになってくるのは第9代のパチャクティからである。図5-1に第9代のパチャクティ王時代から第11代のワイナ・カパック王時代までの領土の拡大の様子を示したが、最終的にアンデスの大部分を領土としたインカ帝国もパチャクティ王時代までは中央アンデスの南部高地だけを支配していた国家であった。

3 山岳文明

このようにインカ帝国のそもそもの始まりについては明らかではないが、インカ帝国が拡大してからの様子についてはかなり明らかになってきている。インカ帝国を征服したスペイン人たちが記録を残しているからである。それによれば、インカ帝国の中心地は現ペルー南部高地に位置するクスコであり（写真5-1）、その領土は、4つのスーユと呼ばれる地方に分けられていた。そのため、インカ帝国はケチュア語で「4つの地方」を意味する「タワテンクスーユ」が正式な名称であった。これら4つの地方とは、チンチャイスーユ、コリヤスーユ、アンティスーユ、そしてクンティスーユである（図5-2）。

最初のチンチャイスーユとは、クスコの北方に位置する地方で、現在のエクアドルも含んでいた。コリヤスーユは、クスコの南方に位置する地方でティティカカ湖畔を経て、現在のボリビアやチリ北部、さらにアルゼンチン北西部まで含む広大な地方であった。アンティスーユは、クスコの東方、主としてアマゾンに面したアンデス東斜面の地方であった。クンティスーユは、4つの地方の中で最も小さく、クスコの西側の太平洋岸に至る地方であった。

つまり、タワテンクスーユは、クスコを中心として四方に広がる大帝国であり、これら各地方にはインカ王の命によりつくられた王道が通じていた。この王道をとおして各地の情報や生産物がクスコに集められた。そのため王道の主だったところにはタンブと呼ばれる宿泊所がもうけられ、そこをチャスキという飛脚が頻繁に通っていた。

ただし、インカ帝国の中核はあくまでアンデスの山岳地帯にあった。首都のクスコも標高約3400mのペルー・アンデス山中にあった。また、チンチャイスーユの領域であっ



写真5-1 インカ帝国の中心地であったクスコ（標高約3400m）



写真5-2 インカ・ヤクタ。ボリビア・アンデスの東斜面にあり、インカの砦のひとつと考えられている

た太平洋岸もすべての地域にインカ帝国の支配が十分におよんでいたわけではなく、ペルー北部海岸などは影響が小さかった。さらに、アンティスユウの領域であったアンデス山脈の東側も、その山麓地帯はアマゾン流域の諸民族が支配する地域であり、インカ帝国への彼らの侵入を阻止するためにアンデス東斜面の各地に砦が築かれていた。たとえば、ボリビア東部にあるインカ・ヤクタもインカ帝国の砦のひとつと見なされているが、それは標高約3000mのアンデス東斜面に位置している（写真5-2）。このようにアンデス文明の最後をかざるインカ帝国の中核地帯は山岳地帯にあり、この意味でインカ帝国は山岳文明といってよさそうである。

インカ帝国の中核地帯が山岳地帯にあったことは、インカ時代に築かれた公共建築物の大部分がアンデス山中に集中していることからもうかがえる。この公共建築物は、しばしば美しく切り出された石をびったり組み合わせ、石のすき間に「カミソリの刃さえさしこめない」と表現されるような石壁もある。インカ帝国が滅亡してから約500年たった今日でも、往時の面影をしのばせる建築物がアンデス各地で見られる。そこで代表的なインカの建築物をいくつか紹介しておこう。

クスコはインカの中心地であっただけに、クスコおよびその周辺部には立派なインカ時代の建築物がいくつも残されている。そのひとつ、クスコの町を見おろす北方の丘にはサクサイワマンの名で知られる大城塞がある（写真5-3）。巨大な石を何段にもびったり積み重ねてあり、「とうてい人の手で作られたとは思えない」とスペイン人を驚かせたほどである。また、その石積み全体からはインカの人たちの優れた美的感覚もしのばせる。



写真5-3 クスコ郊外にある城砦，サクサイワマン



写真5-4 オヤンタイタンボの城塞の石壁。巨大な石をきっちり積み上げている

クスコからウルバンバ川を少し下った標高約2800mの谷間にもインカ時代の城塞がある。オヤンタイタンボである（写真5-4）。この城塞は丘の斜面に建てられ、頂上部には「太陽神殿」の一部を構成していたと考えられる巨大な石壁が残されている。この城塞こそは、1536年、ワイナ・カパック王の息子であるマンコ・インカが反乱をおこした時、インカ軍がたてこもりエルナンド・ピサロのひきいるスペイン軍に激しく抵抗したところである。

クスコからウルバンバ川を下ると有名なマチュピチュがある（5章扉写真）。険しい山の尾根の上に計画的に築かれた都市であり、しばしば「空中都市」と形容される。山の斜面には立派な石積みの階段耕地も広がっている。インカ時代の遺跡としてはやや低い標高約2400mに位置しており、近年の研究によれば第9代インカ王のパチャクティの私領（郊外の王宮）であったとされる。



写真 5-5 ビルカスワマン



写真 5-6 インガビルカ。エクアドル・アンデスの南部にある

クスコ県のほぼ西に位置するアヤクーチョ県の高原地帯にもインカ時代の建築物がある。標高3470mの高原にあるビルカスワマンである(写真5-5)。インカが最も重要視した場所のひとつであり、インカとしては珍しく、ピラミッド状の建築物である。上方の基壇の上には大きな石の腰かけがあり、記録者によると昔は黄金でおおわれていたとされる。

ペルーを北上し、エクアドル領内に入ってもインカの建築物は見られる。そのひとつがエクアドル南部高地にあるインガビルカで、これも標高3160mに位置する(写真5-6)。円形状の基壇の上に神殿が建っており、その周辺にはコルカの名前で知られる倉庫群もあったらしい。

4 飢える者がいなかったインカ帝国

アンデス各地に都市や城塞をつくっていたインカ帝国はかなりの人口を擁していたはずである。この人口については諸説あるが、少なく見積もっても1000万以上とされる〔ピース・増田 1988〕。首都のクスコも約20万の人口を擁し、当時南アメリカ最大の都市であった。そして、大きな人口以上に驚かされることがインカ帝国にはあった。それは、きわめて豊かな食糧に恵まれていたらしいことである。そのため、侵略したスペイン人たちは、インカ帝国には物乞いをする者も飢える者もおらず、「一般庶民は自分の家で必要とするものをすべて自分で調達していた」〔インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 406〕と驚いている。

さて、それでは、インカ帝国のアンデス住民は何を食べていたのだろうか。どのような農業をおこない、何を主要な食糧源として、これほどの大帝国を築き上げることが可能となったのだろうか。じつは、これが意外にわかっていないのである。インカ時代のアンデス住民が何を食べていたのかということを問題にする研究者がいなかったからだ。その背景には、インカ帝国の主な食糧は検証されることなくトウモロコシであると考えられてきたという事情があった。また、インカ帝国の中核となった山岳地帯では降雨のせいで食糧源となる有機物の遺物がほとんど出土しないという事情もありそうである。

しかし、考古資料にかわる資料がある。それが先述したクロニカ、すなわちスペイン人たちが書き残した記録である。その記録によれば、スペイン人を驚嘆させた農耕技術があった。それは灌漑技術である。この灌漑の技術そのものは、インカからさかのぼること約1000年も前のモチエヤナスカでも見られたことは指摘したが、それがインカ時代にはかなりの発展をとげていたのであろう。その灌漑技術に驚いているスペイン人が少なくないのである。たとえば、サンチョは次のように述べている。

「トゥンベスからチンチャにかけての一带は、海岸の幅が10レグア（1レグアは約5.6km）前後である¹⁾。この地域は平坦な砂漠地帯で、雨量もわずかで、草も育たないのに、トウモロコシや果物が豊かに実る。それは、山岳地帯から下る川の水を使って灌漑耕作がおこなわれているからである」。〔Sancho 1968 (1534): 325〕

この灌漑は、スペイン人が南アメリカに最初に建設した都市であるリマをもうるおしていた（図5-3）。リマも降水量の乏しい砂漠地帯に位置しているにもかかわらず、そこにスペイン人たちが彼らの町を築いたのは立派な灌漑のおかげだったのであろう。この点についてムルーアは次のように述べている。

「リマック川からは、川とよんでもよさそうなほど幅の広い用水路がひかれている。その用水路は2本にわかれ、広大なリマの谷全体にゆきわたっている。そこが雨量に乏しく、土

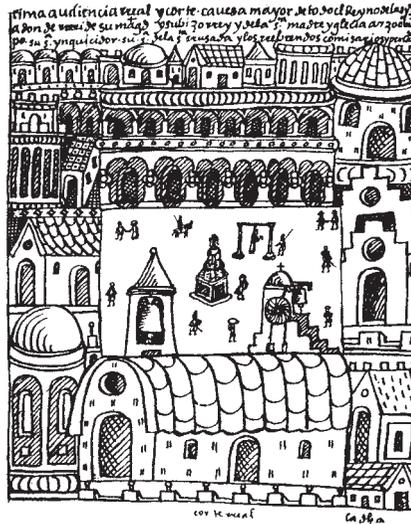


図5-3 リマ [Guamán Poma 1980 (1613)]

地を湿らすには不十分だからである。(中略) このように川から2方向にひかれる水によって、小麦やトウモロコシの畑、そして果樹園などが4レグア以上にわたって広がっている」。
[Murúa 1962 (1590): 194]

また、シエサ・デ・レオンもペルーの海岸地帯で「信じがたい場所にも灌漑水路が引かれている」と驚き、それにつづけて次のように述べている。

「これらの谷でインディオはトウモロコシを栽培し、2度の収穫をおこなうが、それでも豊作である。場所によってはユカ(マニオク)も栽培されるが、これはトウモロコシが不足するとき、パンや飲み物をつくるのに役立つ。また、栗そっくりの味をした甘いサツマイモも栽培される。何種類ものジャガイモやインゲンマメ、その他おいしいイモ類もある」。
[Cieza 1984 (1553): 202]

太平洋岸の海岸地帯の谷では、灌漑によって様々な作物が栽培されていたことが、次の記録からもうかがえる。

「これらの谷の地味は肥えており、インディオの引いた灌漑水路の水によって潤されている。収穫される食物の種類はインディオ、スペイン人いずれの食物もたいへん豊富である。トウモロコシ、コムギ、オオムギ、インゲンマメ、ペピーノ等が多く収穫される。マルメロやリンゴ、オレンジ、ライム、上質の実がとれるオリーブなどの果樹が多い。美味なブドウ酒のできるブドウや、太いサトウキビもたくさん栽培される」。
[Lizárraga 1987 (1599): 11]

このように何人ものスペイン人が灌漑について言及し、そこでは雨量が乏しいにもか

かわらず、立派に作物が栽培されていることを強調している。ところで、これらのスペイン人たちの記録を見ていると、海岸地帯ではトウモロコシだけでなく、様々な作物が栽培されていたことがわかる。灌漑というとアンデスでは、すぐにトウモロコシ栽培とむすびつけられるが、実際は必ずしもそうではなく、様々な作物が灌漑によって栽培されていたのである。

この点で、先のシエサの報告はとくに興味深い。トウモロコシだけでなく、マニオクやサツマイモなどのイモ類も栽培されていたと報告しているからである。また、トウモロコシが不足するとき、それを補う作物がマニオクであった点も興味深い²⁾。モチエ文化で検討したように、ペルーの海岸地帯ではトウモロコシとマニオクが2つの重要な作物であったことを物語るからである。また、トウモロコシが不足するとき、マニオクが「飲み物をつくるのに役立つ」と述べているが、この飲み物とは酒であった可能性が大きい。もしそうであれば、インカ時代、ペルーの海岸地帯ではトウモロコシとともにマニオクの酒も飲んでいただことになる。

もうひとつ、シエサは注目すべきことを報告している。ペルーの海岸地帯で「何種類ものジャガイモ」が栽培されていたというのである。これまで海岸地帯におけるジャガイモ栽培については可能性にとどめていたが、このシエサの報告でインカ時代にはジャガイモはアンデス高地だけでなく、海岸地帯にまで拡大していたことがわかるのである。

5 階段耕地

クロニカを見ていると、はじめてインカの領土に入ったスペイン人たちを驚嘆させた農耕技術が、少なくとももうひとつあった。それは階段耕作である。灌漑は、海岸地帯で古くからおこなわれていたが、階段耕作は山岳地帯にかぎられ、山岳地帯に多い斜面を階段状にして、そこを耕地とする方法である。階段耕地そのものは世界各地で見られるが、アンデスのそれは精巧につくられ、しかも大規模なものだった。そのため、この階段耕地について記録を残しているスペイン人が少なくない。

たとえば、マティエンソは次のように述べている。

「インガ（インカ王）はローマ人の建設規模をしのぐ用水路や石畳み（の道路）をつくらせたが、標高の高い山岳地帯の石や岩だらけの斜面も播種できるように石を使って階段耕地をつくらせた。こうして、平野部だけでなく、標高の高いところも、播種が可能になり、実り豊かな土地になる」。[Matienzo 1967 (1567): 8]

征服者のフランシスコ・ピサロとともに、インカの首都であるクスコに1553年5月、到着した彼の従弟のペドロ・ピサロも、クスコ近くの階段耕地について次のように書き記している。

「すべての階段畑は、崩れ落ちるおそれのある部分が石で囲っており、その高さは1エスタード（約1.9m）、またはそれ前後である。そのあるものには、1ブラサ（約1.67m）またはそれ以下の石が間隔をおいて、階段のように配置され、石壁に打ち込まれている。そこを伝って上り下りするのである。これらの階段畑はみなこのようにできている。そこにトウモロコシを播くから、雨が畑をこわさないように、平らにならされた土のおもてを保とうとして、そのように石で土止めたのである」。[ピサロ 1984 (1571): 146]

じつは、このようなインカ時代の階段耕地は現在もクスコ周辺のあちこちで見られる。そして、その階段耕地は大きな石をきちんと積み上げ、きれいな等高線を描いているものが多い（写真5-7）。この点については次のコボの記録に詳しい。いささか長くなるが、インカ時代の階段耕地に関するほとんど唯一の詳細な記録なので以下に引用しておく。

「インディオたちは、可能であれば、雨量の少ない場所のみならず、十分に雨の降るところでも畑に灌漑をほどこそうとする。このためにたいへんな労力と技術を要する2つの事柄をおこなう。まず、急勾配の土地をならし、灌漑や耕作をおこないやすくする。そうすることによって、ふだんは全く不毛で役に立たない多くの土地を利用するためである。土地をならす一方で彼らがパタと呼ぶ段々畑を山の斜面につくる。耕作地を囲うために間隔をおいて同じ高さの石壁を対にして立てる。段々畑の幅は、斜面の勾配の大きさに左右される。勾配の小さい斜面では、50、100、200フィートあるいはそれ以上の幅のある段々畑が見られる。勾配の大きい斜面では、3、4フィートしか幅のないものもあり、ひじょうに狭く、階段のようである。間隔をおいて立てられた壁は、最高で1、2エスタード（1エスタードは約1.95メートル）の高さである。壁にはピエドラ・セカ（モルタルを使用しない粗石積みに用いる石）が使われ、なかにはきわめて入念に加工されているものも見られ、四角でもないのに互いにぴったりと組み合わされている。これはクスコ周辺において現在も数多く残っている段々畑に見られるとおりでである。インディオはこのようなやり方なくしては、とうてい耕



写真5-7 インカ時代の階段耕地，ウイニャイワイナ。ペルー，クスコのアンデス東斜面にある



写真5-8 ティボン遺跡の灌漑水路。ティボンはクスコ近郊にあるインカ時代の遺跡。階段耕地に立派な水路がひかれている

作できないような、山のかなり高く、険しいところまで播種をおこなう。今日、遠くから眺めると、上から下まで段で覆いつくさされているように見える。彼らは、川の水を利用し、行きわたるところすべてに灌漑を施していた。用水路に関する作業が、彼らのおこなう仕事の中でも最も大規模で、驚嘆に値するものである。用水路はきわめて精巧かつ整然と引かれているので、われわれの鉄の道具を持たずしてそれを建設し得たことは驚きである。というのも、川の堰は増水に備え、たいへんしっかりと補強されているからである。何レグアにもわたって水路の水嵩は一定であるが、中にはたいへん水量豊かな水路もある。水路は、平地のみならず、険峻な高い山々にも延びている」。[Cobo 1956 (1653) /II: 251-252]

このコボの記録で注意すべきことは、階段耕地に灌漑が施されていることである。コボが述べるような入念につくられた階段耕地は、山岳地域で灌漑をおこなう上で重要な役割をはたしたと考えられる。ペドロ・ピサロも指摘しているように、アンデスに多い斜面にあるような耕地では、そこに水を引くことによって土壌が浸食され、とくに肥沃な表面が流出して河川に流れ込んでしまうからである。この問題を解決するためのひとつの方策として考えられたのが、階段耕地の建設であった。

ちなみに、この水路を引くことに対してインカの人たちは尋常ならざる情熱を注いだようである。インカ時代の建築物は巨石を使って精巧に造られたことで知られるが、この技術が水路づくりにも生かされ、しばしば水路としては驚くほど精巧に、また美しく

つくられているのである（写真5-8）。

6 2 種類の耕地

さて、それでは、このように立派な階段耕地でインカ時代の人びとは何を栽培していたのだろうか。ピサロがクスコ近くの畑で見たように、それは主としてトウモロコシだったようである。この点についてはインカ・ガルシラーソの記録が参考になる。インカ・ガルシラーソはスペイン人ではなく、最後のインカ皇女とスペイン人のあいだに生まれた混血であった。ケチュア語も解し、アンデスの伝統文化にも詳しい人物である。

インカ・ガルシラーソは「水が引かれな限りトウモロコシの種が播かれることはなかった」と述べた上で、以下のようにつづける。

「さて、水路が開かれると、今度は土地が平らにならされ、さらに水がうまくいきわたるように、土地が四角く区切られた。それが肥沃な土地であれば、今日クスコをはじめとしてペルー全土に見られるような段々畑が造られた」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 380]

このインカ・ガルシラーソの記録とほぼ同じ様子をワマン・ポマが図に描き、「水がうまくいきわたるように、土地が四角に区切られた」様子も描いている（図5-4）。

ただし、インカ帝国の耕地がすべてトウモロコシ用だったわけではなく、もちろんジャガイモなどのイモ類を栽培している耕地もあった。この点についてインカ・ガルシ

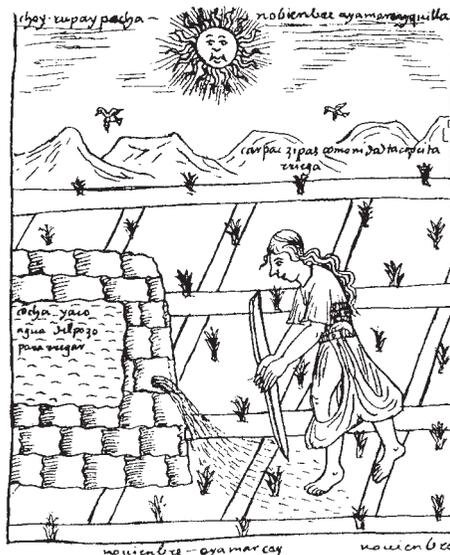


図5-4 灌漑をほどこしたインカ時代のトウモロコシ耕地 [Guamán Poma 1980 (1613)]。

ースは次のように述べている。

「灌漑されたトウモロコシ畑の他に、水の引かれていない耕地もまた分配され、そこでは乾地農法によって、別の穀物や野菜、例えば、パパ（ジャガイモ）、オカ、アニユス（マシユア）と呼ばれる、非常に重要な作物の種が播かれた」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 381]

つまり、インカ・ガルシラーソによれば、インカ時代の耕地には2種類あったと考えられる。すなわち、灌漑を施した畑と無灌漑の畑である。そして、基本的に前者はトウモロコシ用の耕地であり、後者はジャガイモやオカ、マシユアなどのイモ類の耕地であった。

こうしてクロニカを追ってゆくと、トウモロコシとジャガイモなどのイモ類の栽培には様々な違いがあったようである。それをもう少し追ってみよう。インカ・ガルシラーソによれば、これら2つの作物のあいだでは次のように耕地の使用法も異なっていた。

「(水の引かれていない)土地は水不足ゆえに生産性が低いので、1、2年耕しただけでこれを休ませ、今度はまた別の土地を分配する、ということが繰り返された。このように彼らは、循環的に使用することによって絶えず豊富な収穫が得られるよう、やせ地を見事に管理運営していたのである」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 381]

すなわち、この記録によれば、灌漑を施していないジャガイモなどのイモ類の畑は、1、2年使っただけで休閑するというのである。他方、トウモロコシ用の畑は次の記録のように連作していたようである。

「一方、トウモロコシ畑には毎年種が播かれた。そこは果樹園のように、水と肥料に恵まれていたので、豊作が約束されていたからである」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 382]

この記述からは、トウモロコシが連作できるのは、その畑が水と肥料に恵まれていたからだという。この肥料とは何だろうか。クロニカによれば海岸地帯でのトウモロコシ栽培には魚や海鳥の糞などが使われていたが³⁾、山岳地帯でのトウモロコシ栽培にはまったく違うものが使われていた。それは、次の記録に見られるように人糞であった。

「人々は施肥によって土地を肥沃にしたが、注目すべきことに、クスコ盆地全域、およびほとんどの山岳地帯では、トウモロコシの肥料に下肥が用いられ、それがいちばん良いと言われていたのである。それゆえ下肥作りを重視した彼らは、精を出して人糞をかき集め、それを乾燥させ、粉末状にして、トウモロコシの播種期に備えて保存していた」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 387]

一方、ジャガイモなどのイモ類栽培のための肥料には家畜の糞が使われていた。この点についてもインカ・ガルシラーソの次の記録が参考になる。

「……寒さのためにトウモロコシの育たないコリャオ地方では、150レグワ以上の全域にわたって、人びとはジャガイモやその他の野菜に家畜の糞を施し、それが他のいかなる肥料よりも有効だと言っていた」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 387-388]

ここで述べられているコリャオ地方とは、ティティカカ湖畔地方のことである。ここはインカ時代においてもリヤマやアルパカなどのラクダ科動物が数多く飼われていたことが知られているので、肥料には不自由しなかったと考えられる。

表5-1 トウモロコシとジャガイモの栽培方法の違い

	トウモロコシ	ジャガイモ
栽培地	温暖地 (ユンガ・ケチュア)	寒冷地 (スニ・プナ)
灌漑	あり	なし
階段耕地	ふつう使う	あまり使わない
耕作方法	連作	休閑
肥料	魚・人糞・海鳥の糞	家畜 (リヤマ・アルパカ) の糞尿
農具	鋤	踏み鋤

このようにトウモロコシとジャガイモでは、それが栽培される耕地だけではなく、肥料も違っていたのである。さらに、トウモロコシとジャガイモなどのイモ類とでは、耕作に使われる農具も違っていたようである。後述するように海岸地帯のトウモロコシ耕地では主として鋤が使われていたようであるが、高地部のジャガイモなどのイモ類の耕地ではインカ時代になって新しい農具が登場してくる。それが踏み鋤である。

この踏み鋤については、章をあらためて検討するが、トウモロコシとジャガイモでは、農具も含めて、その栽培方法もかなり異なっていたのである。それをまとめて見ると表5-1のようになる。それでは、同じ畑作の作物でありながら、なぜトウモロコシとジャガイモではこれほどまでに様々な点で異なっているのであろうか。ひとつは、栽培される土地の生態的な条件が違っているためであろう。トウモロコシは高温に適し、水分を多く必要とする作物であるのに対し、ジャガイモは寒冷地に適した作物であり、降雨量の乏しいところでも栽培が可能なのである。

もうひとつは、歴史的な条件の違いではないか。歴史的な条件とはジャガイモ栽培の歴史がアンデスではきわめて古く、スニやプナなどの寒冷高地に適応したかたちで農耕技術を発達させてきたと考えられることである。先にチャビン・デ・ワントルではジャガイモを中心とするアンデス高地産の作物栽培とアンデス高地産の家畜飼育を組み合わせた生業形態が確立していたと述べたが、これは肥料としての家畜の糞の利用の点からもいえそうである。一方、アンデスの山岳地帯におけるトウモロコシ栽培の歴史は比較

的新しく、とくに灌漑をともなった階段耕地の普及はインカ時代になってから大幅に拡大したと考えられる。この点についてはのちほど詳しく検討しよう。

7 「主食はジャガイモ」

ここまでで見てきたように、インカ時代に入るとアンデスにおける農耕の様子はかなり具体的に明らかになってくる。とくに興味深い点はトウモロコシとジャガイモを中心とするイモ類栽培の方法の違いである。

さて、それでは、主としてアンデスの山岳地帯で暮らしていたインカ帝国の住民はトウモロコシとジャガイモのどちらを主な食糧源にしていたのであろうか。この問題についてもクロニカ資料が参考になる。そのひとつを紹介しよう。スペイン軍と一緒にアンデスを南下してきたシエサの記録である。彼はティティカカ湖畔のコリャオ地方を訪れ、「コリャス（コリャオ）という名のこの土地は、私の見るかぎり、ペルー最大の地方で、また、人口の最も稠密な所である」と述べたうえで、そこに住む住民の暮らしや食糧について次のように述べている。

「住民たちは家をそれぞれびったり寄せ合って密集した村を形成している。彼らの家はさほど大きくはなく、すべて石造りで、屋根は瓦の代わりに、彼らがいつも利用しているワラで葺かれている。昔、コリャスの住む地域にはくまなく、人々が大勢住んでおり、ここには大きな村がいくつかあり、ことごとく隣接していた。現在、インディオたちは村のまわりに畑を耕し、そこで食用の穀物を栽培している⁴⁾。彼らの主食はジャガイモである。それは、(中略) 地中にできる松露のようなもので、彼らはそれを天日にさらし、次の収穫まで保存する。そして、乾燥したあとのジャガイモのことを、彼らはチュノ（チューニョ）と呼んでいる。これは、彼らの間で大切に扱われ、とても貴重なものとされている。と言うのも、この地方には、この王国の他の地方とは異なり、畑を灌漑する水がないからである。この乾燥させたジャガイモの食糧がないと、飢えに苦しめられ難渋し、苦勞する」。〔シエサ 1993 (1553): 233-234〕

このように、シエサはコリャオ地方では「彼らの主食はジャガイモである」とはっきり述べている。

アンデス高地住民の主食がジャガイモであるという指摘は他のクロニカにも見られる。たとえば、コボもそうである。コボはジャガイモだけでなく、それを乾燥したチューニョについても詳しく、しかも正確に記録しているので、その部分も含めて引用しておこう。

「温暖な地帯でなら育つトウモロコシや穀類、マメ類もペルーの山岳地帯や寒冷地では、どこでもできないので、インディオたちは、ふつう、パパ（ジャガイモ）と呼ぶイモを栽培

している。このパパは、松露のような大きさをしたもので、これを乾燥したのもも含めて、ペルーでは非常に一般的な食糧となっている。ペルーのインディオの半分は、これ以外のパンをもっていないほどである。(中略) アフォラ (アイマラ語でアファル) という野生の苦いジャガイモもあるが、これは食べない。インディオたちが栽培、利用しているのは味のよいものである。ただし、彼らの栽培しているものなかには、ルキという、いくぶん苦味のあるジャガイモもあるが、これはチューニユ (チューニョ) の材料に良い。[Cobo 1956 (1653): 360-362]

一方で、コボは次のようにも述べている。

「パンは国中どこでも同じというわけではない。最も一般的なものはトウモロコシで、次にマニオクのパンである。これは多くの地方で食べている。その他のパンはいろいろなイモから作る。たとえば、ユカ、ジャガイモ、オカ、その他である」。[Cobo 1979 (1653): 27]

おそらく、「最も一般的なものはトウモロコシで、次はマニオクのパンである」という記録は低地部での観察に基づくものであろう。そして、「その他のパンはいろいろなイモから作る」という観察は主として高地部のものであると考えられる。とにかく、ここでは、あくまで高地部を対象としていることに留意していただきたい。

さて、コリャオ地方の人びともジャガイモだけを食べていたわけではなく、ジャガイモ以外にも重要な栽培植物はあった。シエサも、ジャガイモについて述べたあと、「オカと呼ばれる別の食糧があり、これも有用である」と述べ、さらに「キヌアと呼ばれる、米のように小さな穀類」についても「有用な食糧」として言及している。また、ピサロも、コリャオ地方の栽培としては、ジャガイモのほかに、「オカという根菜」および「キヌアという穀類」についても言及している [ピサロ 1984: 129-130]。

ジャガイモを乾燥したチューニョについては、コボ以外にも言及しているスペイン人がいる。新大陸を広く歩いたアコスタ神父もそのひとりで、彼は次のように述べている。

「……新大陸の他の地方、たとえばビルー (ペルーのこと) の山地の高い地域とか、ビルー王国の大きな部分を占める、コリャオという地方 (ティティカカ湖畔の高原) などでも、小麦や玉蜀黍を育てることはできず、そのかわり、インディオは、パパ (ジャガイモ) という別種の根菜を用いる。これは松露のようなもので、上にむかって、小さな葉を出す。このパパを収穫すると、日光でよく乾かし、砕いてチューニョというものをつくる。これは、そのまま何日も保存され、パンの役目を果たす」。[アコスタ 1966 (1590) (上): 372]

これらの記述から見て、ティティカカ湖畔のような寒冷高地での主食は、ジャガイモおよびそれを乾燥したチューニョであったと判断してよさそうである。

ところが、少し気にかかる記録もある。それは、ティティカカ湖畔の住民が寒冷地では育たないトウモロコシも食糧にしていたという記録である。たとえば、ピサロは次の

ように述べている。

「彼らは“南の海”（太平洋）や、“北の海”（大西洋）の方角にある川の流域でとれるトゥモロコシを食糧としているが、これは彼らがたくさん持っている家畜やその毛と交換して手に入れるのである」。[ピサロ 1984 (1571): 130]

シエサも次のように報告している。「コリャオ地方（ティティカカ湖地方）全体でトゥモロコシの収穫や播種はおこなわれないが、そこには「トゥモロコシ、コカ、あらゆる種類の果実、そして大量の蜂蜜などが、ひっきりなしにはいつてくるのである」という[シエサ 1979 (1553): 366]。

なお、「蜂蜜は密林の大部分にある」とシエサは述べているので、おそらく、これらの産物はアマゾン低地から運ばれてきたのであろう。そして、その背景についてシエサは以下のように述べている。

「このコリャス、および寒さのため、暑い地方ほど作物が取れず、めぐまれていないペルーの他のすべての盆地や川の流域地方において、[インカ王は] 命令をくだし、アンデスの大地が、多くの村々の近くに位置していたから、各村から一定数のインディオにその妻をつけて行かせた。彼らは、その首長や部将たちの命令し指定した場所に配置され、耕作をおこなうのだが、じぶんたちの郷里の環境ではできないようなものを作って、その収穫を、首長・部将たちに提出した。そして彼らはミティマエスと呼ばれた」。[シエサ 1979 (1553): 366]

これら2人の記録から、ティティカカ湖畔に住む人たちは、高地の資源だけではなく、アマゾン低地や太平洋岸の海岸地帯の資源まで利用していたことがわかる。食糧だけにきぎっても、彼らは高地産のジャガイモだけでなく、低地産のトゥモロコシも手に入れて利用していたようである。それでは、彼らはジャガイモとともにトゥモロコシも主な食糧にしていたのだろうか。

8 ルパカ王国の食糧源

このような疑問に大きなヒントを与えたのが、アメリカの歴史民族学者、ジョン・V・ムラの研究であった[Murra 1975; 1978; 1980]。それは1970年代のことであったが、彼が提示した考え方はアンデスの民族学や考古学にきわめて大きな影響を与えた。彼の研究は、なぜアンデスでインカのような大規模な社会が成立したのかという長年の疑問に大きなヒントを与えるものだったからである。そこで、その研究を少し詳しく紹介しておこう。

ムラは、これまで使ってきたクロニカとは少し異なる史料を利用した。それはビシータの名前で知られるもので、16世紀後半にスペイン王室が新大陸における円滑な植民地



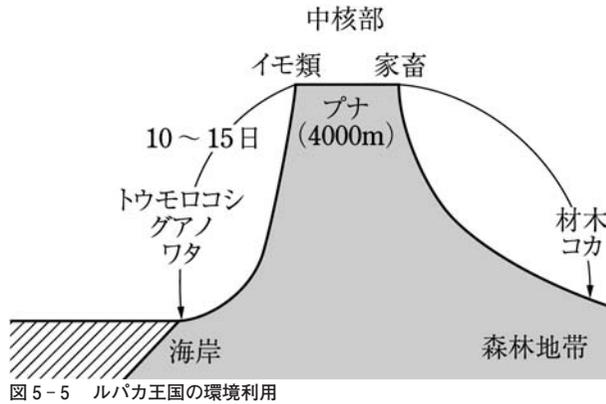
写真5-9 チュクイト（ペルー・プーノ地方）の遺跡。後方はチュクイトの集落

経営を目的として役人に各地の実情を調査させた記録である。そのうちのひとつが、スペイン人巡察使のガルシ・ディエス・デ・サンミゲールによるルパカ王国のビシータであった。ルパカは、インカによる征服後も、ティティカカ湖畔で、もともと政治的・社会的自立性を維持していた王国である。

ルパカは、ティティカカ湖西岸にあるチュクイトを中心として（写真5-9）、そこから約100kmの範囲を占めていた。16世紀、その世帯数は約2万、人口が10万から15万人と推定される大きな政治集団であった。ルパカのほとんどはアイマラ語を話すアイマラ族であったが、この社会の下層にウル族という漁撈民がおり、また全体を大きな権力をもつ長が統治していた。

さて、彼らの生業の中心は、プナでおこなわれるリヤマやアルパカの牧畜とイモ類栽培を中心とする農業であった。リヤマとアルパカの頭数は多く、1567年、チュクイトの近くのフリだけで3242世帯が1万6486頭も飼っており、ルパカ全体では少なく見積もっても8万頭以上飼っていたとされる。そして、このティティカカ湖畔がルパカ王国の人口と権力が集中する中核部であった。

ただし、ルパカはこの高地部のほかにも、アンデス山脈の西側の海岸地帯と東側の低地にも土地をもち、そこに一部の人間を送って農耕を営んでいた。海岸地帯では谷間のオアシス状のところでワタヤトウモロコシを栽培し、肥料用に利用されるグアノと称する海鳥の糞も採取していた。これらの地域はティティカカ湖畔から片道で10日から15日、あるいはそれ以上もかかる遠隔地であった。一方、アンデス山脈の東側の低地ではコカを栽培したり、木材を入手したりしていた。なお、これらの低地部は、いくつかの異なる民族集団の利用するところであった。たとえば、ルパカのすぐ隣に位置していたパカヘ王国も、ルパカが利用していた太平洋岸の同じところに土地をもっていた。



こうしてムラは、アンデス高地の経済の基本は、高度により異なる自然資源を最大限に利用することにあり、そのため各民族あるいは各集落（共同体）が様々な自然区分帯に人を送って資源の入手に努めていたことを明らかにした。また、アンデスにおける生態学的環境は垂直に分布する列島，すなわち「垂直列島」のようなものであり、それを利用する方法を「垂直統御（パーティカル・コントロール）」と呼んだ。以上述べたことを模式的に図示したものが図5-5である [Murra 1975: 77]。

さて、この図を参考にしながら、あらためてルバカの人たちが何を主な食糧にしていたのかという疑問に挑戦して見ることにしよう。この図でも示されているように、ルバカ王国の中核部は標高約4000mのティティカカ湖畔にあったが、そこを中心としてアマゾン側の熱帯低地と太平洋側の海岸地帯などにも土地をもっていたことから、様々な食糧を入手していたに違いない。しかし、人口と権力の中心が標高4000m前後の高地に位置していたこと、そこが同時に基本的な食糧の栽培と管理の中心地であったこと、さらにすぐ近くに大規模な放牧地帯があったことなどを考慮に入れると、ルバカ王国の基本的な食糧源は高地産のイモ類とラクダ科家畜の肉ではなかったかと考えられる。

たしかに、海岸地帯ではトウモロコシも栽培していたが、その量はルバカ住民の全体から見れば、さほど大きいものではなかったであろう。先述したようにルバカ全体では世帯数が約2万と推定されているのに対して、海岸地帯などへ移住した世帯数はわずかに数百ほどでしかなかったとされる。また、アンデス山脈東側の低地にある集落についても「小さな村々」と記述している。これらのことから移住先の人口は少なく、海岸地帯でのトウモロコシ耕地も高地部でのジャガイモ耕地などと比べればきわめて小さいものであったと考えられるのである。

それでは、海岸地帯のトウモロコシは何の目的で栽培されていたのであろうか。高地部での食糧不足を補うためのものであったのだろうか。おそらく、そうではなく、特殊な用途をもつ作物として栽培していたのではないかと考えられる。たとえば、祭りや儀

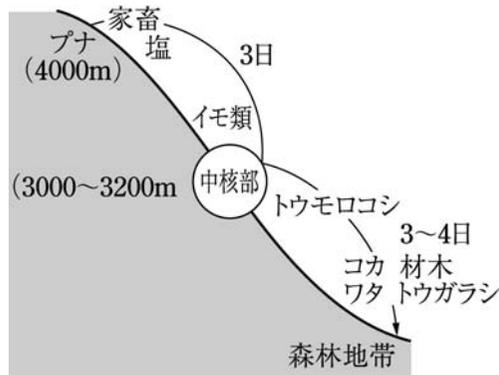


図5-6 チュパイチュ族の環境利用

礼に欠かせない酒、そして特別な料理の材料を提供する作物としてである。これは、ルバカ王国が海岸地帯やアマゾン地帯に人を送り込んで栽培させたりして入手していたものが、主としてココヤワタ、木材、肥料となる海鳥の糞など、高地では産しない特殊な用途をもつものばかりであるという事実によっても裏付けられているようである。この点についてはのちほどあらためて検討することにして、ティティカカ湖畔以外の地域における食糧生産システムについても見ておこう。

冒頭で述べたようにティティカカ湖が位置するあたりはアンデスのなかでも高原の部分が高く、また標高が高くなっているが、そこから北上して現ペルーの中部あたりまで来るとアンデスは幅がせまくなり、高度も低くなる。このようなペルー中部山岳地帯にワヌコという地方があり、この地方のビシータ [Ortiz de Zúñiga 1967 (1562)] もムラが整理、分析している。

ワヌコ地方はアンデス東斜面に位置し、アマゾン上流のワリヤガ川流域にある。そして、この川の上流域の一帯には16世紀当時、チュパイチュ、ヤチャ、ケロ、ヤロスなどの小さな民族集団が分布し、各グループは小さな集落をいくつもつくって住んでいた。このうち、チュパイチュ族はケチュア語を話す、世帯数が2500から3000という小さな民族集団であった。彼らは多数の集落にわかれて住んでいたが、その集落はいずれもアンデス東斜面の標高3000~3200mに位置していた。これは、ちょうど、その下部にあるトウモロコシ畑と上部にあるジャガイモ畑の中間に位置していて、どちらの畑にも住民たちは集落から日帰りで行往することができた (図5-6)。

さらに、彼らは集落ごとに標高4000mのブナと低地の森林地帯にもミティマフ (ミティマエス) と呼ばれる植民者を送り、そこに住まわせて様々な資源を得ていた。すなわち、中核部の集落から3日くらいの距離にあるブナでは家畜を飼い、塩を採取していた。また、集落からやはり3、4日かかる森林地帯にも彼らの畑があって、そこではワタ、トウガラシ、ココを栽培、さらに木材や蜂蜜なども手に入れていた。なお、ブナ帯と森

林地帯は、チュパイチュ族だけでなく、いくつかの異なる民族集団の利用するところであった。

このチュパイチュ族の環境利用の方法も、ルパカ族のように熱帯低地から寒冷な高地までの大きな高度差を利用し、高度によって異なる多様な資源を最大限に利用している点では共通していると見てよいだろう。ただし、ルパカ王国の中核部がブナ帯にあったのに対してチュパイチュ族では中核部がケチュア帯にある。したがって、チュパイチュ族ではジャガイモ耕地に比べてトウモロコシ耕地がルパカ王国ほどには小さくなかった可能性がある。

9 強制移住者たち

このように、ルパカとチュパイチュでは環境利用の方法に大きな違いが見られたが、共通点もある。それは、大きな高度差を利用し、多様な資源を手に入れていたことである。この点で重要な意味をもっていたのが、遠隔地に住民の一部を送りこんでいたことだ。このような強制移住とでもいうべきインカの統治政策は、ミティマエスが代表的なものであった。先のシエサの報告によれば、ルパカ王国ではトウモロコシやココア、蜂蜜など、ティティカカ湖畔の高地で入手できない産物をもたらしたのはミティマエスと呼ばれる者であった。つまり、インカの命令によって、ある土地から別の土地に強制的に移住させられた人たちであった。シエサによれば、ミティマエスには次の3種類の人びとがいた。ひとつは、新たに征服した土地の住民を把握し、監視するための人びとであった。このなかにはスパイもいて住民の動向に耳を傾け、その様子を派遣官やインカ王に報告した。

第2のミティマエスは、地方での反乱や陰謀に対する兵力として集められるものであった。アンデスの辺境地方、とくにアンデス東斜面の低地部の住民は好戦的で、しばしばインカの土地の人間を捕虜として連れ去ることがあったからである。

第3のミティマエスこそは、新しい土地で農業や家畜飼育のために移住させられた人びとであった。彼らについてシエサは次のように述べている。

「……もし、山地・盆地・平地・山麓地などで農耕や家畜の飼育に適した土地を征服していった、もしそういう土地が気候と土壌のゆたかさゆえにめぐまれ、しかも人が住んでいないとすると、そこを占拠してのちすぐさま、近くの諸地方にたいして命令し、入植するに十分なだけの人間を送らせたのである」。[シエサ 1979 (1553): 114-115]

このような入植者に対しては、インカ王から様々な特典が与えられた。まず、すぐに土地が分配され、収穫が得られるまでは食糧も家畜もすべてが支給された。さらに、何年間か税も免除されたうえで、女性やココアまで支給された。こうして、「平地の多くの川

の流域に人が住みつき、山地の村もできていった」とシエサは述べている。

インカ王は、新しい植民地には灌漑技師まで派遣したらしい。この点についてインカ・ガルシラーソは次のように述べている。

「インカ王は新たに王国あるいは地方を征服すると、まず太陽崇拝とインカの規律に従って統治の礎を築き、さらに住民の生活様式を定めた後、耕地を増やすようにと命じたが、この耕地とはトウモロコシのなる畑のことであり、この目的のために灌漑技師が派遣された」。
[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 379]

この記述から新たな事実がうかがいあがってくる。それは、インカ王は征服地にミティマエスを送りこんで耕地を拓かせたが、その耕地はトウモロコシ畑だったというのである。先にインカ・ガルシラーソは、「水が引かれない限りトウモロコシの種が播かれることはなかった」といっている。このように、アンデスではトウモロコシ栽培と灌漑は密接な関係があった。だからこそ、灌漑技師も派遣されたのであろう。この点で、インカ・ガルシラーソの次の報告は興味深い。

「段々畑はだいたいにおいて、太陽とインカ王に割り当てられたが、それというのも、段々畑の造営を命じたのがインカ王だったからである」。
[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 381]

この記述と先の報告とをあわせて見ると、トウモロコシ耕作は、灌漑と階段耕地、さらにインカ王と密接な関係をもっていたことがうかがえる。この点で、後者の文中にある「段々畑はだいたいにおいて、太陽とインカ王に割り当てられた」という言葉も重要である。そこで、インカ時代の土地の分配方法についても述べておこう。

インカ時代の土地は3分され、ひとつは太陽信仰の宗教のため、もうひとつはインカ王のため、そして残りのひとつがアイユという農村共同体の土地として住民に分配された。これは、征服された民族においても同じだった。ただし、その区分による大きさは必ずしも同じとはいえず、多くの地方で利用できる土地の大きさや人口密度によって定められ、住民に十分な食糧の供給ができるように配慮されていた。

フランスの歴史学者であるナタン・ワシュテルも、インカの土地の3区分法が3等分のことかどうか疑問を呈し、次のように述べている。

「ここで、重大な問題が提起される。それはインカの土地、太陽神の土地および共同体の土地の比率がどれくらいかという問題である。(中略)(チンチャ川流域では)インカの土地は全体の1パーセント以下になる。チンチャ川流域の例は、もちろん限られた一地方のことであり、場所により、また土壌の良否や、インカによる征服の歴史的事情によって、状況は異なっていた。チュクイトでは、インカのために確保されていた土地20トuppが、2分された地区のおのおのにあり、クラカは50から100トuppを使用していた。結局帝国全体では、国家と太陽神に割り当てられた土地は、共同体の土地よりも少なかったと推定していいだろう

う」。[ワシュテル 1984: 101-103]

したがって、「段々畑はだいたいにおいて、太陽とインカ王に割り当てられていた」ということは、トウモロコシが基本的にインカの国家のために栽培されていたことになる。つまり、インカの土地の三分法は、必ずしも区分された大きさが同じであることを意味しなかったのであろう。この点についてはコボも、「この区分は多くの地方で利用できる土地の大きさや人口密度によって定められた」といっている [Cobo 1956 (1653) / II: 120]。

さて、それでは階段耕地が基本的にインカ王やその親族、さらに国家宗教のために使われていたとすれば、一般民衆は何を主な食糧にしていたのであろうか。ここで想起されるのがジャガイモなどのイモ類である。先に指摘したように、インカ時代の耕地は灌漑を施したもののほかに、灌漑なしのものもあった。この点に関してインカ・ガルシラーソは次のようにいう。

「このような（水の引かれていない）耕地もまたきちんと三分法によっておこなわれ、太陽、インカ王と同様、臣下に三分の一が与えられた」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 381]

そして、ジャガイモやオカ、マシュアなどのイモ類こそが水の引かれていない耕地で栽培されていたものであることを先に指摘した。しかし、この「耕地もまたきちんと三分割」されていたかという点については疑問がある。段々畑のトウモロコシ耕地が基本的にインカの国家に割り当てられていたとすれば、イモ類の方は住民により多く割り当てられていたのではないかと考えられるからである。

フランスの民族学者であるファーブルも、インカ帝国の「食糧は基本的に塊茎類の栽培に頼っていた」と述べたうえで以下のようにつづけている。

「トウモロコシ生産は、帝国の拡大と国家組織の拡大に伴って増大した。しかしながら、それは支配機構を通じてすべて巧みに吸い上げられ、農民の食習慣に何ら影響を与えず、相変わらず農民はパバミククー『芋食い』であった」。[ファーブル 1977: 47]

10 酒造りの道具の出現

ここで、もう一度ワリ時代のことをふりかえてみよう。先述したようにペルー南部山岳地帯のカルワラソ谷では、ワリの影響のもとでトウモロコシ栽培が拡大したからである。一方で、ペルー中部山岳地帯のマントロ谷ではワリ時代になってもトウモロコシはさほど重要な食糧源になっておらず、インカ時代になってようやくトウモロコシ栽培が拡大したことが知られている。この点については先述したハストーフたちが興味深い研究を報告しているの [Hastorf 1990; 1993; Hastorf and Johannessen 1993]、それを

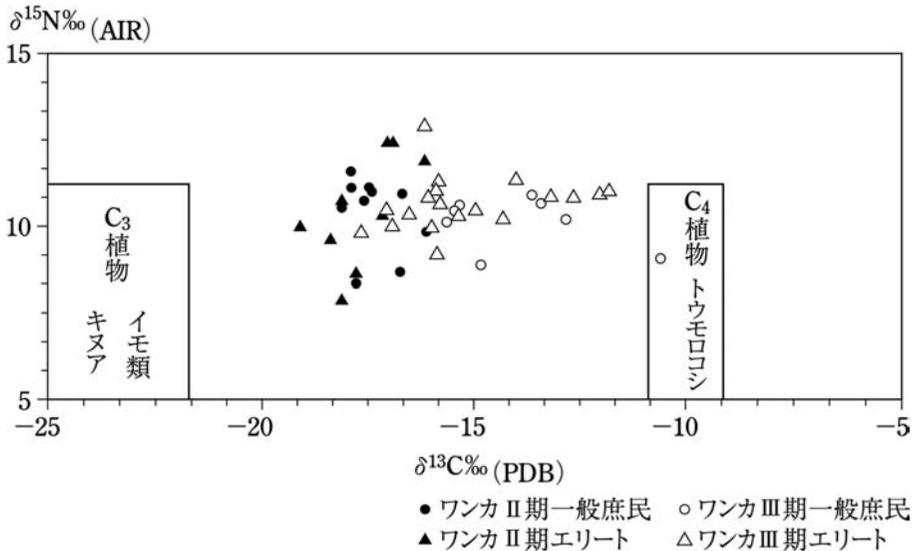


図5-7 ワンカⅡ期およびⅢ期における炭素同位体と窒素同位体の分布 [Hastorf and Johannessen 1993] より

紹介しておこう。

マンタロ谷ではワンカⅡ期（後1300～1460年）まで住民の人口のほとんどが、標高3800m前後のブナ帯に集中していた。そこは寒冷な気候のためにトウモロコシが栽培できない高地である。ところが、インカの支配下にはいるワンカⅢ期になると住居はふたたび谷間の盆地底部に移され、それとともにトウモロコシの遺物も増加してくる。こうしてハストーフは、インカの支配下にはいったワンカⅢ期になると食事に占めるトウモロコシの割合が60パーセントにまで急増すると述べている。

このインカ時代におけるトウモロコシ消費の急増状態は他の面でも確認されている。それが先に紹介した人骨に蓄積された同位体による食性分析である。チャビン・デ・ワタルで分析された人骨はわずか8体であったが、マンタロ谷では47体（そのうち、ワンカⅡ期が18体、ワンカⅢ期が29体）の人骨が分析された。その結果を示したものが図5-7である。先述したように、マンタロ谷でのワンカⅡ期までの主食はジャガイモなどのC₃植物であった。この図5-7では、一般庶民とエリートに分けて記されているが、いずれの階層であれ、ワンカⅡ期、Ⅲ期にかけてトウモロコシへの依存が高まることが明らかである。

もうひとつ、ハストーフたちは面白い発見をしている。それは、出土した土器の形態変化から見たトウモロコシの利用方法の変化である。すなわち、ワンカⅡ期になるとマンタロ谷では大型の土器が増加してくるが、これらの大型の土器はトウモロコシを発酵させたり、その酒を貯蔵しておくためのものであったと考えられている。また、ワンカⅡ期には、酒造りの時にトウモロコシをつぶしたと考えられる大型の石板（パタン）も

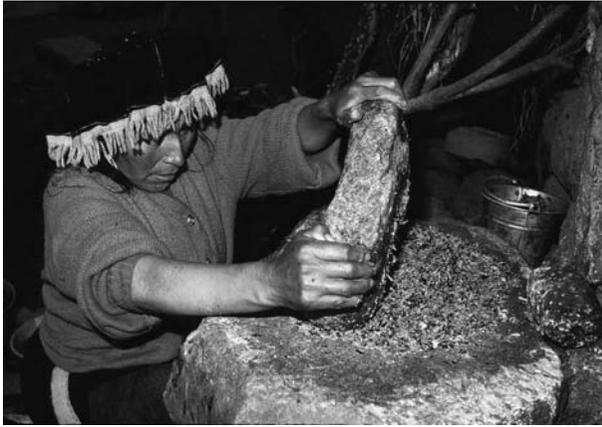


写真 5-10 石板（バタン）を使ってトウモロコシをすりつぶすケチュアの女性。現在もバタンはトウモロコシの酒造りに欠かせない

増加してくる（写真5-10）。このように、マンタロ谷ではワンカⅡ期から酒造りに関係する道具類が増加してくるのである。

これらの事実はトウモロコシの利用の方法の変化を物語るものであり、とりわけ酒の材料としてのトウモロコシの役割の増加を示すものとして興味深い。それというのも、クロニカの記録のなかにはトウモロコシは、食糧としてよりも儀礼や祭礼に不可欠な酒としての価値を強調するものが多いからである。そこで、あらためてトウモロコシの果たした役割についてクロニカの資料から検討してみよう。

11 「聖なる作物」

これまでクロニカの記録を追ってきたところ、インカ王やその親族はトウモロコシ栽培にかなりの執着を示していたことがうかがえる。段々畑のトウモロコシ耕地の多くがインカ王や国家宗教のためであるというのもその例であるし、強制移住させたミティマエスにトウモロコシを栽培させていたのもそうであろう。インカ・ガルシラーソの次のような記録も、その状況を物語るだろう。

「(段々畑の)二段目は一段目より小さく、また三段目は二段目よりさらに小さくというように、上へ登るにつれて次第に小さくなり、最上段になると、僅かにトウモロコシが二、三列並ぶ程度であった。このようにインカ族は、トウモロコシの種を播くための土地をせつせと増やしたのである」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 381-382]

また、クロニカを追ってゆくと、インカ帝国ではトウモロコシは単なる食糧ではなく特別な性格を与えられた作物であった可能性が高い。インカ・ガルシラーソもトウモロ

コシを「聖なる作物」あるいは「天からの贈り物とでもいうべき聖なる穀物」と述べて次のような興味深い記録を残している。

「歴代のインカ王は、それが天から降りて来た自分たちの鼻祖の最初に踏みしめた地であるという理由で、ティティカカ島を何かと礼遇し、その絢爛たる神殿を手厚く保護した。例えば、大小の岩を取り去って地ならしをし、段々畑を作って、そこに遠くから取り寄せられた良質で肥沃な土を盛ったが、それはそこいら一帯が寒冷の地であるが故に、普通では望むべくもないトウモロコシを、なんとか実らせようとしてのことであった。そしてこの段々畑に、他の種と一緒にトウモロコシが播かれ、周到な手入れがなされた結果、僅かながらもトウモロコシの穂軸がとれ、それが聖なる作物としてクスコの王のもとに届けられるのであった。すると王はそれをまず太陽神殿に奉納し、それから選ばれし処女たちを遣わして、王国各地の神殿や乙女の館に分配したのだが、この天からの贈り物とでもいうべき聖なる穀物がまんべんなく行きわたるように、今年はどこどこ、来年はどこどこという具合に、分配は計画的におこなわれた。さらに、このトウモロコシは地方地方の太陽神殿や乙女の館の庭に播かれ、そこで収穫されたものがそれぞれの地方のインディオ部族に再分配されるのであった。また太陽の穀倉、国王の穀倉、そして人民の共同穀倉にこのトウモロコシを一握り投げ入れ、その神聖なる力が、人びとを養う食物としてそこに貯蔵されている穀物を護り、増やし、その腐敗を防ぐのを祈願することもおこなわれていた。そしてこのトウモロコシの、あるいはかの島で取れた何か他の穀物の一粒でも自分の穀倉に保存することのできたインディオは誰でも、自分はこれで一生飢えにくるしむようなことはない、と信じこんだ。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 303-304]

それでは、何のために彼らはこれほどトウモロコシ栽培にこだわったのか。しばらくジャガイモから離れ、この問題を追ってみよう。先に見たようにアンデスには食用となる作物は数多くあったが、そのなかでトウモロコシは何か特別な価値をもった作物だったのではないか。

たしかに、そのような傾向があった。先のムラも次のような例をあげて、その傾向を指摘している。たとえば、16世紀末にワロチリ地方で採集された言い伝えのなかで、ボロをまとった物乞いが焼いたジャガイモしか食べられない人物として描かれている。つまり、この伝説ではジャガイモだけを食べていることは低い社会的階層の証拠となっているのである [Murra 1978: 38]。

さらに、ワマン・ポマも次のように述べている。すなわち、プナの高地に住むコリヤの人たちは体が大きく肥ったインディオであるが、チューニヨを食べ、チューニヨのチチャ酒を飲んでいるので体力も気力もないという⁵⁾。一方、ペルーの北部や海岸などのチンチャイスーヨ地方に住んでいるインディオは、体こそ小さいものの、トウモロコシを食べ、トウモロコシの酒を飲んでいるため、元気がよい、と対照的なことを述べている [Guamán Poma 1980: 308]。

ところが、このような指摘の一方で、貧しい人びともトウモロコシを食糧としていたという次のような報告もある。



写真 5-11 クスコ周辺のトウモロコシ畑。後方はラクチのウイラコチャ神殿

「貧しいインディオたちの食物は、そのトウモロコシと、草とジャガイモその他の野菜類などの収穫物と、山地の川に育つある小魚である。肉はほとんど食わず、首長および首長の命でいただいた者だけが食べる」。[ピサロ 1984 (1571): 273]

すなわち、肉は一部の者しか食べることを許されなかったが、トウモロコシやジャガイモはともに貧しいインディオも食べていたというのである。インカ・ガルシラーソも、「インカ軍の兵糧となるトウモロコシ」、さらに「インディオたちの主食であるトウモロコシ」とも述べている。この後者の言葉は、「主食はジャガイモである」というシエサの報告とは異なっている。

これら2人の報告の違いは、何によるのだろうか。おそらく、地域によって中心となる食糧が大きく異なっていたことを物語るのであろう。シエサの報告はティティカカ湖畔におけるものであったが、インカ・ガルシラーソの観察はインカの首都であったクスコおよびその周辺のものであったと判断されるからである。そして、クスコは標高3400mにあるが、その周辺にはトウモロコシの栽培できる温暖な谷間も位置しているのである(写真5-11)。

ところで、トウモロコシを主食にしていた地域でその栽培にこだわるのは理解できるが、ジャガイモを主食としていた地域でトウモロコシ栽培のために移住までしなければならないのは、一体、なぜなのだろうか。

ここで、ひとつ思いあたることがある。それが、酒の材料としてのトウモロコシの重要性である。実際に、クロニカでもトウモロコシは食糧としてよりも、むしろ酒の材料として欠かせないものであったことをうかがわせる記録が多く、チチャの名前で知られる酒について記録を残しているスペイン人が少なくないのである。そのひとつの理由は酒造りの方法がヨーロッパではまったく知られないものだったからかもしれない。それ

というのも、アンデスでは人がトウモロコシを噛んで吐き出し、その唾液中の酵素で発酵させていたからである [山本 1998a]。

もうひとつトウモロコシが特別視される理由が考えられる。それはチチャ酒が祭りや儀礼に欠かすことのできないものになっていたことである。そのため、スペイン人たちはインカの祭りや儀礼とともにチチャ酒造りやその利用について数多くの記録を残したのである。そこで、次にチチャ酒についてのスペイン人たちによる記録を追ってみよう。

12 「チチャこそすべて」

征服者のスペイン人たちがインカの都であったクスコの町に足を踏み入れた時、そこで彼らが目を奪われたもののひとつが「太陽の神殿」であった (写真5-12)。この神殿はインカの国家宗教である太陽信仰の総本山であり、黄金であふれていたので「黄金の館」を意味するコリ・カンチャと呼ばれることもあった。そのため、多くのスペイン人がこの神殿について記録を残している。たとえばペドロ・ピサロは次のように述べている。

「この太陽〔の神殿〕は、いくつかの大きな館を持っており、そのすべてが、ひじょうによく加工された石造建築であった。また同時に、ひじょうに高く、りっぱに加工された石の囲い壁もあった。その壁の前面には、幅一パルモ (約21cm) 以上の金の帯が、石にはめこまれていた。この帯は、囲いの前面上方全体にわたって付けられていた。囲いには入り口があり、その数はひとつに限られなかった。内部の小さな内庭には、前に言ったように腰掛けのような形の岩があり、金の覆いがかぶされていたが、これは (スペイン人の捕虜となった



写真5-12 クスコの「太陽の神殿」。現在は基壇と外壁だけが残り、その上にはカトリックの修道院が建てられている

アタワルパ・インカ王の身代金の一部として) カハマルカに持って行かれた。日中広場に持ち出されないとき、太陽像はここに置かれた。そして夜になると、像は小さな部屋に収められたが、そのまわりの高いところも、金の板で覆われていた」。[ピサロ 1984 (1571): 111]

この神殿のなかには、もうひとつ注目すべきものがあった。それは儀礼的なトウモロコシ畑である。その「畑」には金でできたトウモロコシが植えられていたのである。この金のトウモロコシはスペイン人たちの注目も集めたようで、ピサロも、シエサも、これを記録に残している。たとえば、ピサロは次のように述べている。

「この畑いっぱい金製のトウモロコシの茎が植えられ、それには本物のトウモロコシに似せて、穂や葉がついていた。それらっさいは上質の金製で、時期がきて植えられるまでは大事にしまっておかれた」。[ピサロ 1984 (1571): 112]

また、この神殿ではトウモロコシの播種や収穫の祭典もおこなわれていた。さらに、この神殿の近くにもトウモロコシに関して興味深いものがあった。それは、一般に「太陽の処女たち」(図5-8)の名前で知られる若い女性の暮らすアクリャ・ワシ、つまり「太陽の処女たちの館」である(写真5-13)。そして、そこでは多数の女性がトウモロコシから酒を造っていたのである。この女性たちについてはシエサが次のように述べている。

「彼女らは、主だった首長たちの娘であってその数は多く、見出されるかぎりでもっとも美しく、あでやかな女性たちであった。彼女らは年とるまで神殿の中に住み、もし男を知るようなことがあれば、殺されるか生き埋めにされるかどちらかで、男の方も同様にされた。

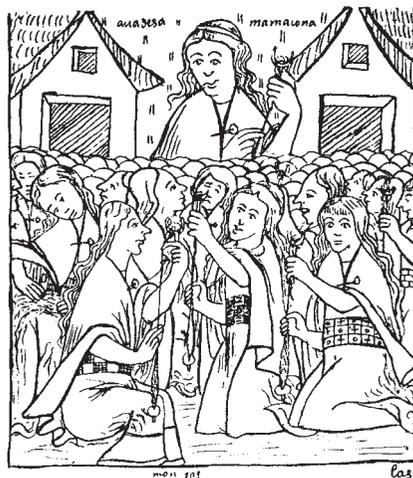


図5-8 糸つむぎをする「太陽の処女たち」
[Guamán Poma 1980 (1613)]



写真 5-13 クスコのロレート通り。ほとんど完全な状態で保存されているインカ時代の石壁。この通りの両側に、アマルカンチャという宮殿と「太陽の処女たち」の宮殿があった

これらの女性たちはママコーナと呼ばれ、神殿で使われる毛の衣料を織ったり染めたりすること、チチャを作ることに専従していた。チチャとは、彼女らの作る酒であり、つねに大きな器をそれで満たしてあった」。[シエサ 1979 (1553): 134]⁶⁾

さて、「太陽の神殿」でつくられたチチャ酒は何のために使われたのか。ほかでもない、インカ王自身が最高の神官となって太陽に捧げられる祭のためであった。この祭は、正式にはインティ・ライミ、すなわち「太陽の祭典」と呼ばれた。「太陽の祭典」は、インカ帝国の最大にして、しかも荘厳な祭であった(図5-9)。この祭についてはインカ・ガルシラーソが詳しい記録を残しているので、それによって紹介してみよう [インカ・ガルシラーソ 1986 (1609): 80-83]。

6月の夏至のあと、インカ王とともに、各地方からクラカと呼ばれる首長たちが楽団をともなって行進した。祭の前夜には、「太陽の処女たち」は無数のサンクと呼ばれるトウモロコシの粉で作ったパンを準備した⁷⁾(当時、これはこの祭と8月におこなわれる重要な祭、シトゥアのときしか食べられなかった)。そして、この大祭の当日に大量に消費されたのがチチャ酒であった。

夜明け前、インカ王は親族とともにクスコの広場にむかった。太陽が姿をあらわすと、人びとは両手を高くあげて礼拝した。インカ王と血のつながらない人びとは別の広場に集まり、そこでインカ王たちと同じように礼拝した。王は酒が注がれた2つの金の杯を両手にもち、まず右の杯を高くかかげて太陽に捧げた。ついで、王は自分の親族にも祝杯をあげるように呼びかけた。乾杯の音頭をとったインカ王は、右手にかかげた太陽に捧げられた大杯の酒を、金の杯に注ぎ入れた。この酒は石造りの導管をとって広場から太陽の神殿に流れこむようになっていた。そして、インカ王は左の杯からひと口飲ん



図5-9 「太陽の祭典」ではチチャ酒が太陽の神にも捧げられた【Guamán Poma 1980 (1613)】

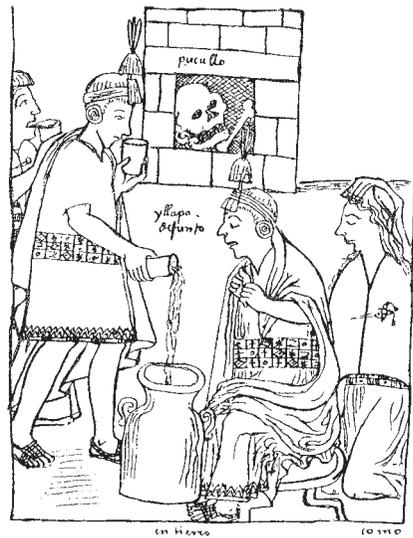


図5-10 チチャ酒は祖先崇拜の儀礼でも欠かせなかった【Guamán Poma 1980 (1613)】

だあと、親族たちがもっている杯に残りを注いでまわった。また、隣の広場にいたクラカたちにも、「太陽の処女」によって準備された酒が与えられた。

おそらく、この「太陽の祭典」だけでもかなり大量のチチャ酒が消費されたであろうが、祭はほかにもあった。とりわけ、トウモロコシやジャガイモ、キヌア、オカなどの収穫が終わった8月の末におこなわれたシトゥア祭は「太陽の祭典」に勝るとも劣らないものであった。このような祭のほか、祖先祭祀の儀礼などもあった(図5-10)。そして、このような儀礼や祭りに欠かせないもの、それこそがトウモロコシで造ったチチャ酒であった。

注目すべきことに、祭や儀礼のほかにインカ軍の兵士や太陽神とインカの畑の耕作をするインディオにもチチャ酒がふるまわれた。コボやインカ・ガルシラーソによれば、この太陽神とインカ王のための畑での農作業は祝祭的な要素を含んだものであった。太陽神のための畑で仕事をするときは神々をたたえる歌をうたい、インカ王の畑を耕すときは王をたたえる歌をうたった。インカ・ガルシラーソによれば、インカ帝国では「土地を耕し、作物を栽培するにも調和のとれた秩序」があり、「人びとはまず太陽の土地を耕し、次に寡婦と孤児の土地、そして高齢や病気のため体が不自由な者たちの土地を耕すことになっていた」という。そして、インカ王および太陽の土地の耕作について次のように述べている。

「いちばん最後に耕作されるのがインカ王の土地であり、これはインディオ全員の共同作



図5-11 インカ時代の農作業は祭りでもあった。
左側の男性が手にするのは踏み鋤
[Guamán Poma 1980 (1613)]

業で行われた。王の畑、あるいは太陽の畑へ農作業に出かける時のインディオたちは皆、満足感と喜びに満ちあふれ、最大の祭事のためにとってあった、金銀飾りのついた晴れ着で装い、頭には大きな羽根飾りをつけていた。そして、鋤で土を掘り起こしながら（当時、これが彼らにとって最も楽しい作業であったのだが）、インカを称えてつくられた多くの歌を口ずさんだ。かくして、労働が祭祀となり、喜びとなっていたわけであるが、それというのも、その労働が彼らの神と王に対する奉仕だったからである。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 383-384]

そして、このとき働き手にチチャ酒がふるまわれたことがポマの図からもうかがえる(図5-11)。このチチャ酒の利用で興味深いことがある。それはチチャ酒の消費が主としてインカの国家宗教であった太陽信仰と密接な関係をもっていたことである。このことはチチャ酒が太陽神との交流のために消費されたこととともに、トウモロコシは単なる食糧ではなく、宗教的あるいは儀礼的にも重要な価値を付与された作物であったことも物語るのである。カトリックの布教のために土着宗教の廃絶をはかっていたスペイン人聖職者のひとりであるアリアーガ神父は、チチャ酒について次のように書き記している。

「ほとんどの供犠で用いられる最重要かつ最良の供え物はチチャである。チチャにより、またチチャとともにあらゆるワカ（聖地）の祭典は始まり、チチャで間をもたせ、チチャで祭りを終わらせる。チチャこそすべてである」。[アリアーガ 1984 (1621): 422]

このようにしてインカ帝国におけるチチャ酒の消費量は増大していったに違いない。

そのため、はじめのうちはクスコだけにあった「太陽の処女たち」の館が地方にまで拡大するようになる。そして、この地方の「太陽の処女たち」の館にも500人から1000人もの若い女性がいて、糸つむぎ、機おり、そしてチチャ酒の製造などに専念していたのである。

13 再分配経済の象徴としてのトウモロコシ

こうしてクロニカを見てゆくと、トウモロコシの利用に関して注目すべきことがうかび上がってくる。それは、食糧としてのトウモロコシの食用に関する記述が少ないのに、チチャ酒の材料としてのトウモロコシに関する記述がきわめて多いことである。ひょっとすると、収穫されたトウモロコシの大半はチチャ酒として消費されたのではないかと、思えるほどである。

もし、この想像が間違っていなければ、それはなぜか、という問題が問われよう。その問いに対して、ひとつ思いあたることがある。それは、インカの再分配経済の象徴としてのチチャ酒の役割である。インカ社会は市場経済以前の世界であり、貨幣の利用は知られていなかった。税はすべて労働によって支払われ、住民には必要に応じて食糧や衣類などが見返りとして分配された。つまり、治める者と治められる者のあいだは互惠関係にあった。このような一般住民とのあいだの互惠関係は、インカ王や地方の首長たちから見れば、再分配の行為にほかならなかった。そして、この再分配のときの贈りものとともにチチャ酒を気前よくふるまうことによって、彼らはしばしば自らの権威を高めていたと考えられるのである。

それを裏づける、こんな話が伝わっている [Santa Cruz 1995 (1613): 87]。それは第10代のインカ王、トゥパック・インカの時代のことである。彼がある祭を主催したとき、招かれた人びとのあいだから、インカ王のもてなしが十分でないと不満の声が聞かれた。それを漏れ聞いたインカ王は、翌年の祭では特別に大きな酒杯をつくらせ、それでチチャ酒を1日に3度も飲ませたという。この話は、インカ王は権威によって集めた富を気前よく再分配しなければならず、とりわけチチャ酒を大量にふるまわなければならなかったことを物語っている。その結果、インカの王室におけるチチャ酒の消費量は膨大なものであったようで、この点については次のような記録が残されている。

「インカの王室における飲み物（おそらく酒のこと）の消費量は、ほとんど勘定できないほど大量であった。それも当然で、王の謁見を求めてやって来る大勢の者たち、それはクラーカであったり、クラーカ以外のインディオであったりし、その用件は表敬であったり、あるいは、戦争や和平にかかわる知らせをもたらす使者であったりしたが、そうした者たちに対してまず王が施した恩恵は、飲み物を与えることだったからである」。[インカ・ガルシラス 1986 (1609): 16]

このように、チチャ酒をインカ帝国における再分配経済の象徴と見れば、トウモロコシ栽培に関する、いくつかの謎も解けそうである。たとえば、インカ王が灌漑技師まで派遣してトウモロコシ耕地用の階段耕地の拡大をはかったこと、それはチチャ酒の消費量の増大に対する方策ではなかったか。また、その階段耕地がきっちり石を積み上げ、精巧につくられていること、これもインカ王の権威や威信を示すものではなかったか。ときに、このトウモロコシ用の階段耕地は、耕地としては不必要なくらいに美しい等高線を描いているが、これもトウモロコシが単なる作物などではなく、神々に捧げられるチチャ酒の材料だったからではないのか。

このような考え方は、見方をかえれば、トウモロコシの大半はやはり食糧としてよりも酒の材料として利用されたことを物語るのではないか。これは、トウモロコシが食糧として利用されなかったということではない。クロニカにも散見されるように、トウモロコシも食べられていたし、地域によっては主食にしていたところもあったのかもしれない⁸⁾。また、トウモロコシはインカ軍兵士の食糧としても重要視されたというクロニカの記録もある。しかし、インカ帝国におけるトウモロコシ栽培の主たる目的はチチャ酒の材料を得るためであり、そのためにこそトウモロコシ栽培の拡大をはかったと考えられるのである。

インカ王がトウモロコシ栽培の拡大をはかっていたことは、これまで見てきたクロニカからも明らかであろう。このことはまた興味深い可能性をうかがい上がらせる。それは、インカ時代まで山岳地帯ではトウモロコシがあまり栽培されていなかったのではないかという可能性である。たしかに、ペルー南部山岳地帯のカルワラソ谷などではワリ時代にトウモロコシ栽培が拡大していたが、ペルー中部山岳地帯のマントロ谷ではインカ時代になってようやくトウモロコシ栽培の拡大したことが知られているのである。

また、灌漑そのものの起源はインカ時代よりはるかに古い時代にさかのぼるものの、クロニカの資料によると灌漑をともなった階段耕地の建設はインカ時代に急速に普及したと考えられる。また、インカ時代の初期に建設されたと見られる階段耕地は規模が小さく、後期になってから大規模なものがつくられる。おそらく、はじめのうちは個人または共同体の手で階段耕地がつくられていたものが、のちには大量の労働力を要する公共事業として建設されたのであろう [Rowe 1946: 210-211]。さらに、この灌漑をともなった階段耕地の分布はさほど広くなく、とくにスペイン人たちが記録した立派な階段耕地は、私の観察によれば、ほとんどがクスコ地方に集中している。このこともまたインカ帝国とトウモロコシ栽培との特別な関係を物語るものであろう。

14 倉庫に貯蔵された食糧

本章の冒頭で、「インカ帝国には飢える者がいなかった」というスペイン人の言葉を紹

介したが、この記述から判断すると、インカ帝国は食糧の生産だけでなく、食糧の貯蔵や再分配も管理していたらしいことがうかがえる。この点について、シエサ・デ・レオンは次のように述べている。

「……この王国は、(中略)たいそう広大であるが、各主要地方には、食糧とかその他、人員補給のために必要かつ有用な品物を納めた倉庫が多数あり、戦争があるときには、王軍がどこに進出しようとも、彼らの同盟者たちの所有しているものや、じぶんたちに属する村々にあるものにいっさい手をつけずに、それらの宿場の貯蔵品を使った。そして、戦争がないときには、その大量の糧食のいっさいは、貧民ややもめに分け与えられた。(中略)そして、もしひじょうな凶作の年が来るようなことがあれば、ただちにその扉を開いて諸地方に必要な糧食を貸与するよう命令された。そして、あとで十分な収穫にめぐまれた年に、人々は、じぶんの手で、きちんと計ってそれを返した」。「シエサ 1979 (1553): 97-98」

この倉庫については3種類あったようで、それについてはインカ・ガルシラーソが記録を残している [インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 401-402]。それによれば、インカ帝国全域に「収穫された穀物や徴収品を保管するための三種類の倉庫があった」。すなわち、そのひとつには「凶作の年に住民を救済するための食糧が備蓄」されていた。もうひとつは、「太陽、およびインカの畑からとれた穀物が保管されていた」。いまひとつは、「彼らがタワンティンスーユと呼んでいた帝国の4方へ進軍する兵士たちの需要を賄う糧食、武器、衣服、履き物が保管されていた」(図5-12)。



図5-12 インカの倉庫(コルカ)
[Guamán Poma 1980 (1613)]

さらに、インカ・ガルシラーソは、「太陽とインカ王の畑からとれた穀物」について次のように言及している。「クスコ市の周囲50レグワ以内にある太陽とインカ王の畑から得られた穀物は、クスコ市に運びこまれ、宮廷の生活を維持するための、そしてインカ王が、参内してくる軍事指揮官や各地のクラーカ（首長）たちに賜与するための食糧として用いられた」。このため、クスコはインカ帝国の政治的中心であっただけでなく、国家経済における重要物資の集積地としても重要な役割を果たしていたのである [ピース・増田 1988: 76]。

倉庫はクスコだけではなく、地方にも数多くあった。この倉庫についてインカ・ガルシラーソは次のように述べている。

「宮廷地域外の町々で収穫されたものは、それぞれの町にある王立倉庫にいったん納められ、そこから必要なだけの量が王道に設けられている倉庫に移された」。[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 402]

ここで述べられている王道とは、一般に「インカ道」の名前で知られるもので、インカ帝国の版図のなかを総延長約4万kmにわたって張りめぐらされていた（写真5-14）。そして、インカ・ガルシラーソによれば、「各地の王道には、3レグワごとに」倉庫がもうけられ、ここに帝国の4方へ進軍する兵士たちのための物資が貯蔵されていたのである。



写真5-14 インカ道。傾斜の多い山岳地帯では石を組んで階段状にした道が多い



写真5-15 タンボ・コロラド。ペルー南部の海岸地帯にあるインカ時代の宿場。山岳地帯で見られる石造りの建築物とは違い、アドベ（日干しレンガ）でできている

なお、インカ道ぞいには、倉庫だけでなく、1日の行程ごとにタンブ（またはタンボ）と呼ばれる宿泊所も各地に設けられていた（写真5-15）。そこにはインカ王やその側近、さらにインカ軍の兵士も泊まったとされる。そして、これらのタンブにも、インカ軍が必要とする糧食や武器、衣類、その他のあらゆる必需品などが貯蔵されていた。

さて、インカの倉庫に貯蔵されていた食糧とは具体的には何であったのか。この点については、残念ながらシエサもインカ・ガルシラーソも具体的に述べていない。そこで、少し推理してみよう。「太陽、およびインカの畑からとれた穀物」とは、トウモロコシではなかったか。先述したように「段々畑はだいたいにおいて、太陽とインカ王に割り当てられ」、この段々畑ではトウモロコシが栽培されていたと考えられるからである。

この推理を裏付けるような報告がある。それは歴史民族学者のムラによる、インカの倉庫に貯蔵されていた食糧についての報告である [Murra 1978: 48]。それによれば28人のクロニスタによるインカの倉庫についての記述のうち食糧について言及しているものは86あり、そのうちの73の記述についてムラは分析している。この記述のうちの9つは食糧一般について述べているが、残りは以下のように具体的な食品名をあげている。すなわち、トウモロコシが29回、チチャが7回、チューニョが7回、ジャガイモが1回、キヌアが5回、オカが3回、干し肉のチャルキが12回である（表5-2）。

表5-2 インカ帝国の倉庫の食糧とクロニスタ記述数 [Murra 1978]

食糧品	記述数
トウモロコシ	29
チチャ	7
キヌア	5
ジャガイモ	1
オカ	3
チューニョ	7
チャルキ (干し肉)	12
計	64

こうして見ると、トウモロコシが圧倒的に多く、トウモロコシを材料とするチチャもあわせると、クロニスタによって記述された食糧のうちの半分以上を占めることになる。この貯蔵庫の食糧の主要な用途は、インカの皇帝や貴族、神宮などの帝国の支配者たちの消費のためであり、またトウモロコシはインカ軍の兵士たちにも、とても好まれた糧食であったとされる [Murra 1978: 176-180]。おそらく、このようなトウモロコシに関する記述の多さが後世の人たちに、「インカ帝国の住民の主食はトウモロコシ」であったと考えさせるようになった大きな要因であろう。

しかし、ここで注意しなければいけない点が少なくとも2つある。そのひとつは、これらの記述のほとんどがスペイン人たちによるものであることだ。したがって、これらの記録は先述したようにスペイン人の価値観をとおして取捨選択されたものであり、かなりのバイアスがかかっている可能性がある。そのため、なじみの薄いイモ類について彼らはあまり関心をもたず、記録を残さなかった可能性がある。実際に、この分析をしたムラも、スペイン人によるイモ類の記述の頻度が少ないことに対しては彼らのイモ類への偏見が関係しているかもしれないと述べている。

もうひとつ、注意しなければならないことがある。それは、スペイン人たちの記録には大きな偏りがある点である。スペイン人たちはインカ帝国に大きな関心をもっていたので、彼らの記録はクスコ地方に集中しており、クスコ以外の地方については記録が少ない。また、これも先述したように彼らの記録はインカ王やその親族に集中しており、一般民衆についての記録が少ない。

それにもかかわらず、トウモロコシについて記録数の多いものがジャガイモを加工したチューニョであったことは注目されてよい。水分を多く含んだ生のジャガイモは重くて輸送に不便であり、また腐りやすいため貯蔵しにくい。ジャガイモをチューニョにすれば運びやすいし、長期の貯蔵にも耐えることを倉庫に貯蔵されたチューニョが物語っているからである。また、チューニョに関する記述は、16世紀前半にはほとんどなく、後期になってから急に増えることから、当初は食糧とみなされなかったか可能性がある。とされ [Murra 1978]、このことも考慮に入れておくべきであろう。実際に、インカの

畑で収穫されたジャガイモのほとんどはチューニョにされ、国家の大きな貯蔵庫に集積され、行軍や戦闘のときの軍隊の糧食になったとされる [Latham 1936 (1553): 176]。倉庫にチューニョがかなり貯蔵されていたらしいことは次の記述からもうかがえる。

「……他の地方は、家の数に相応した何千ものトウモロコシの荷を、収穫期ごとに、じぶんの負担で納税した。他の地方のトウモロコシに見合った量の乾燥したチューニョ（チューニョ）を同じやり方で供出する地方もあった。同じことを、キヌアやその他、根菜でおこなう地方もあった」。[シエサ 1979 (1553): 92]

15 ジャガイモの貯蔵庫

一方で、インカの倉庫には生のジャガイモも大量に貯蔵されていたという報告もある。それは、インカの地方行政センターのひとつであったワヌコ・パンパについての報告による。最近の研究で、インカ道ぞいには、タンブとともに、いくつかの大きな地方行政センターが建設されていたことが明らかになっており、そのひとつがペルー中部高地にあるワヌコ・パンパであった。ここでアメリカ人の人類学者のクレイグ・モリスたちが詳しい調査をおこなった結果、興味深いことがいくつも見つかった [Morris and Thompson 1985]。

ワヌコ・パンパの遺跡は保存状態がよいため、インカ当時の様子をかなり知ることができる。建築構造は、ミニ・クスコと呼んでもよさそうなほどインカの世界観が反映されたものであった。図5-13に示されているように、標高約3800mのなだらかな丘陵地帯のほぼ中央に、大きな方形の広場があり、その中心には基壇が建設され、広場の外側の四方にはクスコ様式の建築物が配置されている（写真5-16）。そして、この建築物のある平坦地から少し離れた山の斜面に500ほどの倉庫群が何列にも整然とならんでいる。これらの倉庫こそは食糧を貯蔵していたと考えられているものなのである（写真5-17）。

倉庫は形態から2つのグループにわけられる。ひとつは円形のものであり、もうひとつは方形のものである。円形の倉庫からはトウモロコシの穀粒と土器の破片が出土しているので、この倉庫ではトウモロコシの穂軸からはがした穀粒を土器に入れて貯蔵したとされている（図5-14）。一方、方形の倉庫からは炭化したイモ類とワラが出土しているので、この倉庫はジャガイモなどのイモ類を貯蔵したとされている [Morris 1992]（図5-15）。

この円形と方形の倉庫は形態だけでなく構造も異なる。クレイグ・モリスは、ここにも注目して前者は主としてトウモロコシ、後者はイモ類用と考えたのである。じつは、円形の倉庫は構造が比較的簡単であるが、方形の倉庫は石を床に敷き詰め、排気溝を床下にもうけるなど、円形の倉庫よりずっと構造が複雑である。この違いは、トウモロコシに比べてジャガイモは貯蔵が困難であることによると考えられる。ジャガイモは水分

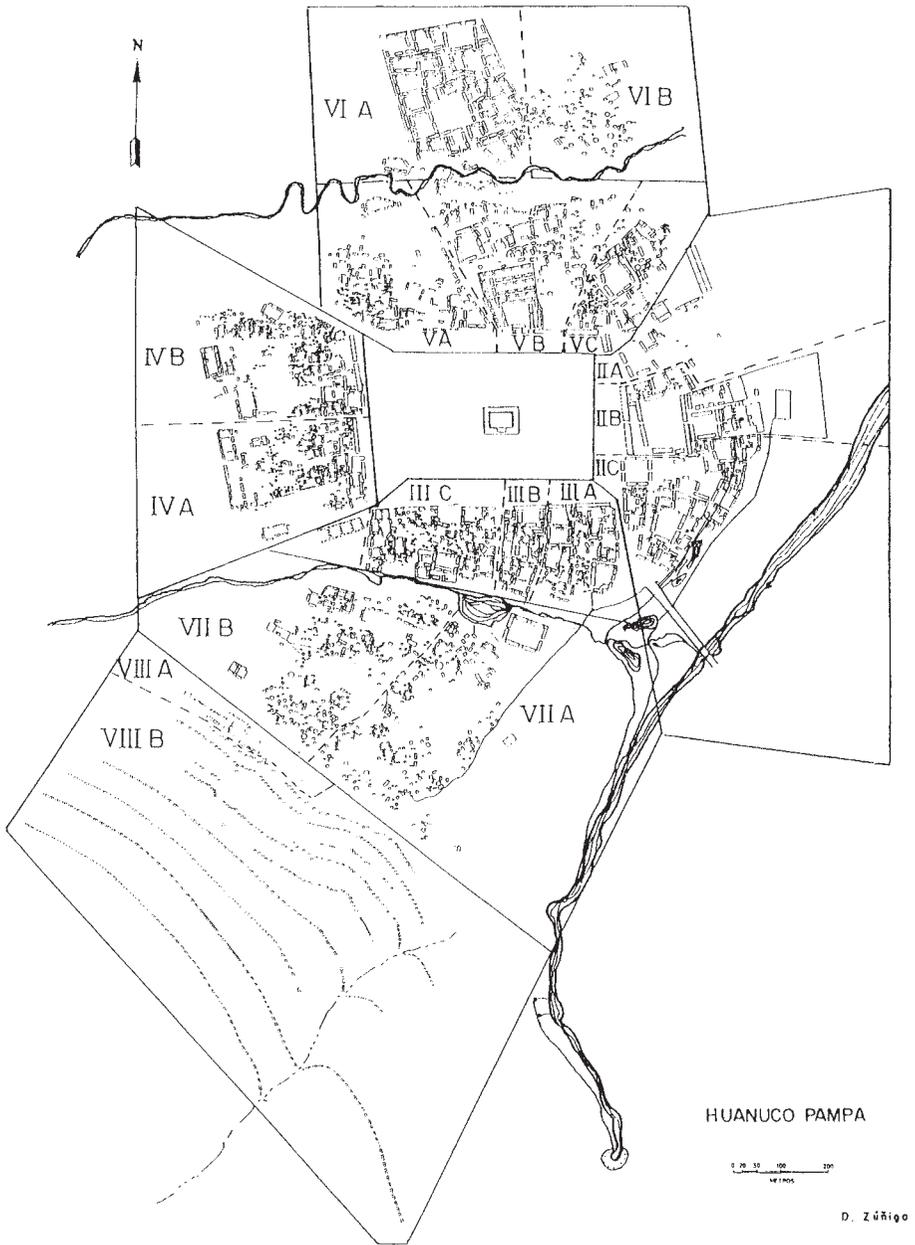


図5-13 ワヌコ・パンパの平面図 [Morris 1985]。VIII Bが倉庫群



写真 5-16 ワヌコ・パンパの中央広場にある基壇。この広場の外側にはクスコ様式の建物が配置されている



写真 5-17 ワヌコ・パンパの倉庫群。山の斜面に直角に約500の倉庫群が整然とならんで建っている

を多く含んでいるため腐りやすいし、発芽しやすいからである。これらを防ぐためにイモ類用の貯蔵庫は、トウモロコシのそれより入念に造られていたのであろう。

クレイグ・モリスはワヌコ・パンパの倉庫に貯蔵されていた食糧の量についても次のように見積っている。すなわち、ワヌコ・パンパの倉庫の貯蔵スペースは3万7900m³であり、そのうちの50～80パーセントはイモ類（ジャガイモ、オカ、マシュアなど）の貯

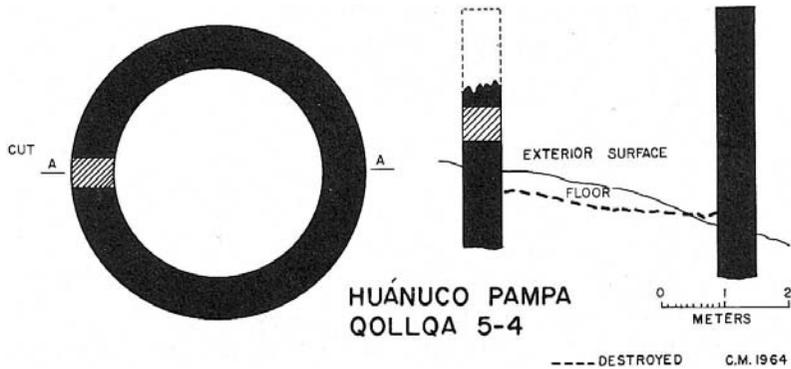


図5-14 トウモロコシの貯蔵に使われる円形の倉庫 [Morris 1992]

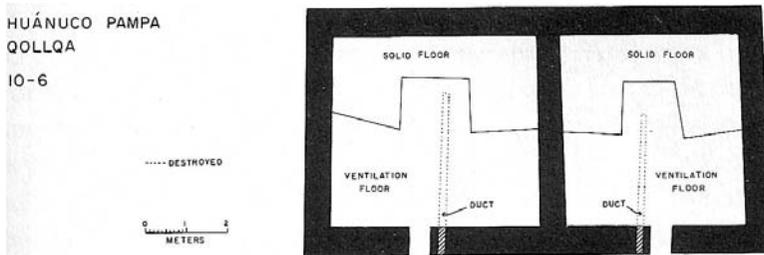


図5-15 主としてジャガイモの貯蔵に使われる方形の倉庫 [Morris 1992]

蔵のために使われ、トウモロコシの貯蔵に使われたのはわずかに5～7パーセントにすぎなかった。そして、残りは食糧品ではなく、武器や奢侈品、さらに工芸品などであったという。また、これほどまでにトウモロコシとイモ類の貯蔵量が異なっていた理由としてはワヌコ・パンパ周辺で利用できる土地の条件が反映された結果であると見ている [Morris and Thompson 1970]。

もしそうであれば、インカの倉庫に貯蔵された食糧は周辺的环境条件によってかなり異なっていたのであろう。クスコのように、周辺にトウモロコシ栽培に適した土地が多くあるところでは倉庫に主としてトウモロコシが貯蔵されていたようであり、それをスペイン人たちは記録したのであろう。しかし、一般にジャガイモが貯蔵しにくいと考えられているにもかかわらず、ワヌコ・パンパではトウモロコシではなく、主としてジャガイモを貯蔵していたことは注目すべきであろう。ジャガイモがインカ帝国にとって重要な食糧源であったことを物語るからである。

もうひとつ、ここで指摘しておきたいことがある。それはジャガイモが貯蔵しにくいと一般に考えられている点についてである。たしかにトウモロコシと比べればジャガイモの貯蔵性が低いことは否めないが、標高が高く冷涼な気候のところではジャガイモもかなり長期に貯蔵できるのである。標高3800mあまりのワヌコ・パンパのジャガイモ貯

蔵はそれを雄弁に物語っているのである。後述するように、現在のアンデス高地の農民もジャガイモを半年ほど貯蔵することはふつうである。

16 隠れたジャガイモの貢献

これまでスペイン人たちの記録を中心としてインカ時代の農耕文化を追ってきたが、そのなかで印象的なことがある。それは、トウモロコシやそれから造られる酒についての記述がきわめて多いのに、ジャガイモなどのイモ類についての記述が少ないことである。この点に関しては増田による興味深い報告がある [Masuda 1984]。表5-3がそれである。これは代表的な13のクロニカについて作物別に記述頻度を調べたものである。それによれば、トウモロコシが圧倒的に多くて385回もあり、それに次ぐのはコカの201回である。一方、ジャガイモは53回とトウガラシよりも少なく、オカについては10回、オユコにいたっては1回だけである。ちなみにトウモロコシから造られたチチャ酒についての記述は203回もあり、作物のなかで2番目に記述頻度の多いコカよりも多く記述されている。

このようにインカに関する記録のなかでトウモロコシは他の作物を圧倒して頻繁に登場する。それでは、これは何を意味するのだろうか。インカ帝国にあってトウモロコシが圧倒的に重要な作物であったことを物語るのであろうか。また、ジャガイモなどのイモ類についての記述頻度が低いことは、作物としての重要性の低さを物語るのであろうか。ここで注意しなければならないことは、先述したようにこれらの記録がスペイン人たちの目をとおして観察されたものであるという点である。また、クロニカの記録のもとになった観察はインカ帝国の中心地であったクスコ地方に偏っている点も注意しなければならない。すなわち、クロニカの記録はスペイン人たちの価値観によって取捨選択された結果であり、かなりのバイアスがかかっていると考えなければならないのである。

表5-3 13のクロニカに見られる作物の言及頻度 [Masuda 1984]

作物名	言及しているクロニカの数	言及している回数
トウモロコシ	13	385
コカ	13	201
トウガラシ	10	56
ジャガイモ	9	53
キヌア	7	11
オカ	7	10
マニオク	5	7
サツマイモ	2	6
オユコ	1	1
チチャ	13	203

これらの点に注意してあらためて表を見ると、記述頻度1位のトウモロコシ、2位のコカ、3位のトウガラシはいずれも食糧としてより、特別な用途をもつものばかりであることに気づく。トウモロコシは先述したようにチチャ酒の材料になるし、コカもチチャと同じように儀礼や祭りに不可欠なものである。そして、トウガラシもしばしば儀礼に使われるほか、スペイン人たちにとっては新しい香辛料としての関心もあったに違いない。したがって、これらの記述の多さは必ずしも作物の重要性を示すものではなく、スペイン人たちの関心の強さを反映したものであると考えられる。一方、ジャガイモなどのイモ類はスペイン人たちにとってアンデスではじめて見るものであり、なじみのない作物であった。これはシエサをはじめとして何人ものスペイン人たちがジャガイモをキノコの1種の松露のようなものという表現をしていることでも明らかである。

もうひとつ、先述したようにクロニカの大半がインカ帝国の首都であったクスコを中心として記述されていることも、トウモロコシやチチャ酒に関して記述頻度の多いことに大きな関係があるだろう。トウモロコシ耕作のための立派な階段耕地はクスコ地方に集中していたし、トウモロコシからつくられるチチャ酒はインカ帝国の国家宗教である太陽信仰の祭りや儀式に不可欠なものであった。これらのこともトウモロコシについての記述頻度の多さに関係していると考えられるのである。

したがって、トウモロコシに比べてジャガイモの記述が少ないことは必ずしも作物としての低い重要性を物語るものではないと考えられる。実際に、クスコだけでなくティティカカ湖畔にまで足を踏み入れたスペイン人たちは「主食はジャガイモである」と断言している。また、クロニカのなかにはインカ王が自分たちの食糧として味のよいジャガイモを栽培させるためにペルーのクスコからエクアドルのキトまで肥沃な土壌を運ばせたという記録もある [Murúa 1964 (1590): 111]。また、ワヌコ・パンパで見られたようにジャガイモもインカの倉庫に大量に貯蔵されていた。

これらの事実は、ジャガイモもインカ帝国にとってきわめて重要な作物であったことを物語るであろう。ジャガイモの重要性は、スペイン人たちがあまりにもトウモロコシやその酒のチチャのみに大きな関心をはらっていたために、その陰に隠れていただけではないのかと考えられる。たしかに、インカ帝国はトウモロコシの栽培をめぐって強制移住をさせたり、灌漑をともなった階段耕地を普及させたりするなど、トウモロコシが帝国拡大の大きな要因になっていた。その点でトウモロコシは「政治的な性格をもった作物」[関 1995]であったが、そこで問題となるのはインカ帝国にあって何がトウモロコシを政治的な作物にしたり、儀礼的、宗教的に重要な作物にしたのかということである。

もしトウモロコシの大半が儀礼や宗教上に重要で特別な料理やチチャ酒として消費されていたとすれば、そこには十分な余剰食糧の蓄積を可能とする生産性の高い作物が別に必要となるであろう。その作物こそはジャガイモに代表されるイモ類ではなかったか。

しかし、この問題を明らかにするためにはクロニカ資料だけでは十分ではない。先述したようにスペイン人たちはトウモロコシに大きな関心をもって数多くの記録を残したが、ジャガイモについての記述が少ないからである。また、クロニカによる記述は農耕に関しては少なく、しかも断片的で全体像もつかみにくい。それを補ってくれそうな研究分野がある。それが、アンデスにおける農村社会の民族学的調査である。そこで、章をあらためてアンデスにおける民族学的調査の成果についても見てみよう。

注

- 1) トウンベスは、太平洋岸に面したペルー最北端の町。ピサロをはじめとするスペイン人たち征服者が上陸したところとしても知られる。トウンベス周辺の海岸地帯ではマングローブ林などが見られるが、そこから少し南下すると砂漠地帯になる。一方、ペルーの中央海岸に位置するチンチャ周辺には、インカ帝国の成立前にチンチャ王国があった。周辺地域は川の流域で見られるオアシス地帯を除けば完全な砂漠となっている。
- 2) この飲み物は、原文では「brebaje (ひどい飲み物)」という言葉で表現されている。インカ時代のアンデスでは、トウモロコシを噛んで吐き出し、唾液で発酵させて酒を造っていた。このような酒をスペイン人たちの大半は brebaje と表現している。
- 3) インカ・ガルシラーソは海岸地帯の肥料について詳しい記録を残している。その一節を紹介しておく。

「アレキープ以南、タラパカに至る二〇〇レグワ余の海岸線では、もっぱら海鳥の糞が肥料として用いられた。(中略) インカの時代には、これらの海鳥はこの上なく大切に保護され、その繁殖期には、鳥が怯えて巣から離れたりすることのないよう、なんびとといえども鳥に足を踏み入れることは許されず、禁を破った者は死刑に処せられた。また、海鳥を殺すことは、季節のいかんを問わず、さらに島の内外にかかわらず禁じられており、違反者は同じく死刑になった。

同じ海岸線上の他の地域、すなわち、アティク、アティキープ、ウリャコーリ、マリヤ、チルカといった窪地、およびその他の谷では、イワシの頭を肥料として施し、それ以外は用いない。(中略) 人びとは、手ごろな太さの棒杵でもって等間隔に穴を開け、その中に2,3粒のトウモロコシの種と一緒にイワシの頭を埋める。これが窪地の耕作において用いられる肥料なのであり、これ以外はどれも害はあっても役には立たない、とされている」[インカ・ガルシラーソ 1985 (1609): 388-389]。

イワシの頭を肥料とする方法はペルーの海岸地帯で一般的であつたらしく、シエサも次のように述べている。

「もしそれぞれ種子と一緒に、彼らが海で網を打って捕った鰯の頭を1つか、2つ入れないと、トウモロコシは決して芽を出さないし、穀粒も身を結ばずに枯れてしまう。そういうわけで、彼らは種子を蒔くとき、穀粒を投げ入れるためにこしらえた穴にトウモロコシと一緒に鰯の頭を入れるのである。そうすると、芽が出て、大量の収穫があがる」[シエサ 1993 (1553): 177]。

- 4) この文中では、食用の「穀物」と訳されているが、原文では sus comidas とあるので、これは食用作物のことであろう。実際に、シエサはこの文の前で「(コリャオは) 非常に寒冷な

土地なので、トウモロコシは実を結ばず」と述べている。

- 5) ここで述べられている「チューニョのチチャ酒」は実在したものかどうかは不明である。これまで知られているかぎり、アンデスで酒の材料となるのはトウモロコシやキヌア、マニオクなどであり、ジャガイモの酒はボマの報告以外にはないからである。
- 6) この文では、「太陽の神殿」に女性たちが住んでいたことになっているが、実際には「太陽の神殿」は女人禁制であつたらしく、彼女たちは神殿近くの館、アクリヤ・ワシで暮らしていた。また、シエサは「これらの女性はママコーナと呼ばれ」と述べているが、これも実際と異なる。インカ・ガルシラーソによれば、ママコーナ（ママターナ）とは「年配の女性」の意味であり、彼女たちはアクリヤと呼ばれる若い女性に糸紡ぎや織物の技術を指導したり、アクリヤたちを統率していたのである。
- 7) サンクは現在もアンデス高地でトウモロコシの収穫時期だけにつくられ、一般にウミタの名前で知られる食べ物であつたらしい。ウミタは、未熟なトウモロコシの穀粒を石臼などでつぶし、その粉をトウモロコシの葉で包んで、焼いた石や熟した灰などで焼いたものである。
- 8) たとえば、先述したマチュピチュで暮らしていた人びとも食事の中心がトウモロコシであつたようだ。マチュピチュで発掘された人骨のコラーゲン分析の結果によれば「骨のコラーゲン中の炭素の大部分はC₄植物の摂取に由来する。明らかにインカ王の家臣たちの主食はトウモロコシであつた。ほとんどの住民の食事の60～70パーセントであつた」。[Burger and Salazar 2004: 89]ただし、マチュピチュは標高2000mあまりのユンガ地帯に位置していること、またマチュピチュの住民は一般の農民ではなく、エリート層であつたことなど、インカ一般に適用できるものではない。